

# 衣・食・住の用具

長井亜弓

## 1. 表の成り立ち

家の中にある生活用具を書き出していくと、「私たちはこんなにも多くの道具を使って生活しているのか」と改めて驚く。風呂の湯がボタン一つで適量適温に溜まる現代の生活でさえそうなのだから、すべてが手作業だった昔の暮らしはどうだったか。「井戸」から「釣瓶桶」で水を汲み上げ、「手桶」に移して「風呂桶」まで運び、「マッチ」で「焚き付け」に火をつけて「薪」を燃やし、「火吹き竹」で火力を調節する。マッチがなかった時代は「付け木」で種火から火を移すか、「火打石」と「火打金」で火花を散らし、「火口」で炎にしなくてはならない。今ボタン一つで済むことが、昔は8個もしくは11個の道具の力を借りなくてはできなかった勘定になる。

さて、名称を考えるにあたり、膨大な生活用具の中から何を抽出すべきか。プロジェクトメンバー各人から「これは必要」「最初に手がけておくべき」という民具を推薦してもらった案も出たが、まずは民具の事典や解説書に記載された民具を書き出し、基本的な民具が出揃ったところで精査する方針が立てられた。そこでまず、文化庁文化財保護部監修『日本民俗資料事典』（第一法規）をもとに叩き台となるリストを作り、さまざまな参考書籍と照らし合わせながら適宜項目を増やしていった。その結果、2013年4月時点までにリストアップされた生活用具は、衣生活用具186点、食生活用具345点、住生活用具375点にのぼる。これに、方言辞典から抽出したさまざまな地域での呼称、プロジェクトメンバーから提出された地域呼称を重ね、ある程度名称の蓄積のできたものを中心にまとめたのが今回の表である。本書に記載した生活用具は、衣の用具119点、食の用具145点、住の用具144点（うち灯火34点）であるが、ここに名前のない民具は「まだ地方での呼び名の収集が不十分である」か「民具というよりも原始的・考古学的な資料である」「民具というよりも素材である」などの理由で割愛した。例えば尻拭きに使われた「捨て木」の場合、地域での呼称に「かきん・すばしぎ・ちゅーぎ・つーぎ・つづぎ（竹製）・すてぎ」などがあり、この名を継承して再生紙の「落とし紙」の時代になっても「ちゅーぎ」と呼んでいた事例が報告されているが、要は使い捨ての木片であり、実物と照らし合わせて検証することが難しいため、本リストからは外した。

## 2. 衣の用具

さまざまな地域での呼称を集めるにあたって、当初から日本国内だけでなく将来的には海外の民具名も収集することを前提に枠組み作りを進めてきた。しかし、似た用途を持つ道具でも形が同じとは限らず、構造は似ていても用途は全く別だったり、用途も形もほぼ同じなのに宗教的な限られた場合にしか使われなかったりと、必ずといっていいほど何かが違うのが実情だ。規格品や同一の型を使った製品でもない限り、びたりと重なるものは存在しない。国内でさえそうなのだから、まして「△△国で□□と呼ばれている道具は、日本の○○と呼ばれているものと似ている（かなり近い）」などと判断するのは、よほど両国の事情に通じていないと難しい。「比較研究をするためには手がかりとなる名称が必要だが、その名称を決めるためには比較研究が不可欠」といった具合に、「鶏が先か卵が先か」と同じような壁にぶつかってしまう。

中でも民族衣装と称される各国固有の服飾は多種多様であり、例えばお隣り韓国を例にとってもチマチョゴリを日本の何かと並べることにはできない。しかし、人間であれば、それがたとえ葉っぱや毛皮一枚であろうとも何かしらのものを身につけるのだから、「衣類」というカテゴリならば、どの国のものでも並べることができる。以上の観点から、衣の用具の名称は「衣類」と大きく括ったのち、さらにどう細分化すれば海外の衣類でも同一レベルに落とし込めるか、を考えながら枠組み作りを行っていった。衣類の次の分類基準として考えられるのは「体のどこに身につけるものなのか」であろう。大抵の衣類は、被り物（かぶりもの）・着物（きもの）・履き物（はきもの）・持ち物（もちもの）くらいには大別できる。なかにはフード付きマントのように頭からすっぽり全身を覆うものもあるし、また、胴付長靴のように胸当てとズボンと長靴が一体になったものもあるが、それは例外として前者は被り物と着物のどちらか、後者は着物と履き物のどちらか、あるいはどちらにも分類しておけば漏れはなくなる。ちなみに現在は着物というと和服を指す場合が多いが、昔（といっても和服も日常的に着られていた第二次大戦前後の頃）までは言葉どおり「着る」物であり、和服も洋服も「着物」だった。和服を指す場合は「きもの」または「キモノ」と仮名表記にしないと「最近の人はモノを知らない」と怒る人もいた

くらいである。しかし、今は洋服を「着物」と書いたら驚く人のほうが多いだろうから、「着る物」としておいたほうが無難かもしれない。

さて、被り物と履き物は、身につける部位が限られているのでまだわかりやすいが、問題は「着る物」である。あまりにも範囲が広すぎてこの段階ではまだ比較研究の対象にはなりにくい。上半身に着るのか、下半身に着るのか、それとも全身を覆うのか。肌着として見えない内側に着るのか、表着としてメインになる衣類なのか。また、日常的に着る「普段着」なのか、特別な儀式で身につける「晴れ着」なのか、動きやすく汚れを気にしないで済む「仕事着」なのか、着用の条件によっても身につける衣類は変わってくる。

将来的には一つの衣類に対して上記のような問いを網羅したデータベースが作られ、「日本」の「民族服」で、「普段着」として身につける「上衣」の「肌着」かつ「女性用」というように and 検索すれば「肌襦袢」にたどりつく、あるいは「韓国」の「民族服」で「普段着」として身につける「下衣」の「表着」で「男性用」と入力すれば「バジ」の画像がずらりと出て来る、そんな仕組みができればと願わずにはいられない。

本書にまとめるにあたって項目数を 88 点に絞ったこともあり、今回は着用場面を限定する「晴れ着」「日常着」「仕事着」の項目と、最小限の枠組み候補として「被り物」「着る物(上衣)」「着る物(下衣)」「着る物(その他)」「履き物」「持ち物(手回り品)」、のほか「化粧・結髪」「洗濯・裁縫」の項目を立てた。男女の衣類が混在している等、未整理な部分が多いが、ご意見お寄せいただけたら幸いである。なお、衣類は時代による変遷が著しいため、名称収集の対象は明治末から昭和中期ぐらいまでを想定している。ただし、明治期に入ってきた洋装については取り上げていない。また、打掛や綿帽子、経帷子など冠婚葬祭時の式服や、野良着・冲着物など仕事着についても場面を分けて扱いたかったが、今回は追いきれなかった。今後の課題としたい。

### 3. 食の用具

食生活のための用具については、食料を「どうするのか」という視点で区切ると、全体を網羅しやすく、海外の民具もある程度並列できるのではないかと考えた。「すりばち」のない国でも、「すりつぶす」道具ならば探せる。そこで食生活用具として集めた項目を「どうするのか」という視点で分類し直し、叩き台として以下のような枠組みを作った。

炊事用具【飯を炊く・湯を沸かす・蒸す・その他】

調理用具【切る・搗る／挽く・炒る／焼く・掬う・捏ねる・おろす・剥く・篩う／濾す・形作る】

加工用具【挽く・搗く・絞る／つぶす】

保存・運搬用具【桶・樽・箱・壺・甕・瓶・栓・その他】

飲食器【膳・口に運ぶ・刺す・汁・飯・飲む・盛る・給仕・保温・携帯・運搬】

嗜好品用具【酒器・喫煙】

その他【箆／籠・洗う・移す・拭く】

「炊事」「調理」「加工」の境界は曖昧だが、「どうする」の部分があれば食生活に関する用具はだいたい網羅できそうである。「何を」の部分も合わせて特定すれば、ある程度近い道具が見えてくる。「米を」+「炊く」、「芋を」+「蒸す」、あるいは「液体を」+「口に運ぶ」道具を限定し、さらに素材、形等々の条件を詰めていくことで、近いものを探ることができる。最初に挙げた「すりばち」を例にとれば、「食品を」「すりつぶす」道具のうち、「鉢」型で、「中に刻み目がある」ものという条件を与えれば「すりばち」に相当する道具とそれについて名称が無理なく探せるという寸法だ。その意味で、「搗る」「鉢」という名称は、実態がよくわかる名前の例といえる。

ただ、搗鉢方式で考えた場合、類似のものがいくつもある場合がある。例えば「湯を」「沸かす」=「湯沸かし」。「注ぎ口がある」「取っ手がある」と条件を重ねても、「土瓶」「鉄瓶」「薬缶」が同列に並ぶ。かなり近い道具といえなくもないが、日本人であればこれらを一緒くたにすることには抵抗があるだろう。表を見ていただければ一目瞭然だが、「土瓶」「鉄瓶」「薬缶」それぞれに豊かな地域呼称の広がりがあり、その背景には地域の人々に使われ、ともに歩んできた歴史がある。

今回一覧に挙げた 145 点は、閲覧の便宜上「貯蔵用具」「炊事用具」「調理・加工用具」「飲食器」「酒器」「運搬・携帯用具」「喫煙具」というカテゴリで区切ったが、何で括るか、どこまで括るか、これも今後の課題である。

### 4. 住の用具

衣食以外の生活用具が、すべてこの項目に入っているため、大きさも形も用途もさまざま、バラエティ豊かな民具が揃っている。どの項目一つとっても、掘り下げていけばいくほど面白く、少し形や素材が違うだけで異なる名前がつけられているものも少なくない。わずか 144 点しか紹介できないのがもどかしいくらいだが、それぞれが一冊の本として成立するほどの中身を内包しており、すでに図鑑や図録となって刊行されているものもある。限られた誌面ですべてを紹介するのは不可能なので詳細はそれらに譲り、住の用具のインデックスを概観しているつもりで見ていただければ幸いである。ただ、下位項目に豊富な種類があることがわかっているものについては、「説明欄」の中にそれらの名称をなるべく挙げておくように心がけた。例えば一般に「障子」といった場合、枠に紙を貼り付けた「明り障子」を意味するが、「襖」にも「唐紙障子」という別名があり、「障子」の持つ広がりには大きい。「明り障子」に限定しても、使用する【季節別】にみれば雪見障子、書院障子、柳障子、夏障子など、【開閉方式】の違いでいえば、引障子、開障子、嵌込障子、摺上障子など、【縦横組子の形】の違いからは豎繁障子、横繁障

子、霞障子、大阪格子など、【その他】にも東障子、腰付障子、腰高障子、水腰障子などの種類がある。季節や構造まで絞込んでしまうと、重なるものがかかり限定されてしまうため、「障子」という大括りの総称で探さざるを得ない。現在、地域での呼称として「あかい・あかいさんばしり・あかいさんばしる・あかり・あっかい・さま・しょーじまど・すてい・そーじやどう・はーり・まど」を収集したが、障子全般を指す言葉なのか、それとも「雪見障子」などの限定された障子に対してのみ使われる言葉なのか、名称収集作業と同時並行して、実物と丁寧に照らし合わせておく必要がある。

住の用具に関しては扱うものが多岐にわたるため、衣の用具のように身につける箇所で括ったり、食の用具のように

「どうする」など用具の持つ機能や使う目的で区切れるものもあれば、それだけでは分けきれないものもある。例えば「火を」+「灯す」=「灯火」だけでは、行灯も提灯も石油ランプもすべて一括りになってしまう。さらにそれを分ける定義が必要である。

本書では閲覧の便宜を考え、「火床の用具」「暖房具」「間仕切り・家具」「寝具」「水回りの道具」「掃除用具」「その他」という使用目的（もしくは使用場所）に区切って項目を挙げた。

また「灯火」は代表的な住生活用具の一つだが、すでに研究を進めておられるメンバーに選定・解説をお願いし、別項とした。「灯火具」の項をご参照いただきたい。

---

## 参考文献

- |                                  |                                    |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 文化庁文化財保護部監修『日本民俗資料事典』（第一法規）1970年 | 須藤功編『写真でみる日本生活図引4 すまう』弘文堂 1994年    |
| 磯貝勇『日本の民具』『続・日本の民具』岩崎美術社 1971年   | 日本民具学会編『日本民具辞典』ぎょうせい 1997年         |
| 宮本馨太郎『かぶりもの、きもの、はきもの』岩崎美術社 1985年 | 川村善之『日本民具の造形』淡交社 2004年             |
| 岩井宏實ほか『民具が語る日本文化』河出書房新社 1989年    | 岩井宏實監修・工藤員功編『絵引 民具の事典』河出書房新社 2008年 |
| 宮本馨太郎『民具入門』慶友社 1990年             | 山口昌伴『図説 台所道具の歴史』GK研究所 2012年        |
| 宮本馨太郎『図録 民具入門事典』柏書房 1991年        | その他多数。                             |
| 小泉和子『台所道具いまむかし』平凡社 1994年         |                                    |

名称	説明	さまざまな呼称
<b>衣の用具</b> <span style="float: right;">長井亜弓</span>		
<b>被り物</b>		
 <p>てぬぐい 手拭</p>	<p>頭部の鉢（頭囲）に手拭や布などを巻く習俗。女性は手拭を開いたまま頭髪を包む「手拭かぶり」、男性は手拭を細く折って頭の鉢に巻き結ぶ「鉢巻」として使用。頭髪の乱れを防ぐために、布などで包んだり縛ったりしたことがはじまりとされる。</p>	<p>【手拭】 いじえ・いて・えちゃ・いちゃ・えて・えもみ・いもみ・さじ・さず・したーでいー・しゃつらぞーきん・ずぼど・たな・ちゃきん・ちゃげん・つらのげ・つらふき・ていさーじ・ていさじ・ていさじ・ていさずい・てきん・てこー・てふぎん・てんでこ・となくるみ・ふぎんの・ゆいて・ゆーちえ・ゆーて・ゆーてー・ゆーてん・ゆーとい・ゆつけ・ゆつけ・ゆて・ゆで・ゆてー・ゆてん・ゆとり・ゆもみ・よーて・よて・よで 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【手拭】 さじ・ちゃげん・てさじ・てさず・ゆずい・たな・ゆてさず 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 <p>はちまき 鉢巻</p>	<p>頭部の鉢（頭囲）に巻く布の結び方、また、その布。前額部で結ぶのを向鉢巻、後頭部で結ぶのを後鉢巻、しごいて撚りをかけて前額部に挟みこんだものをねじり鉢巻などという。</p>	<p>【鉢巻】 さーじ・さーでいー・さじ・さんつい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鉢巻】 さじ・ちゃげん・てさじ・てさず・ゆずい・たな・ゆてさず 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 <p>たな</p>	<p>带状の被り物。目を避けて顔に巻き付けて着装する。タナはタヅナ（手綱）の転訛もしくはタナコヒ（手拭）の下略という説もある。</p>	<p>【タナ】 ヒロタナ、ナガタナ（ナガテヌゲ）、ハンコタナ（ハナガオ・ハナケ） 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）</p>
 <p>ずきん 頭巾</p>	<p>頭や面部を覆う布製の被物。布帛を円形に縫ったもの、円形に縫って綴（しころ）を付したものの、円形に縫って覆面を施したもの、着物（小袖）の袖状になったもの、風呂敷様の布帛で包むものなど多様な種類がある。屋外作業用の頭巾のうち、ドモコモ（供薦）・サントク（三徳）・カガボシ（加賀帽子）は、主に秋田・山形・新潟などの日本海側の諸県下で、女性が被ったもの。新潟県下ではヤマボシ・マルボシ・オカブリ、秋田県ではマドボッチなどとも呼ばれる。</p>	<p>【頭巾】 てっぺんぶくろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇） 【ドモコモ、サントク、カガボシ】 ドモコモ、マドボッチ、ボシ、カガボシ、ヤマボシ、マルボシ、オカブリ、サントク、マドボッチ、フロシキボッチ、オカブリ、ホカブリ、ホオカブリ、サンカクカブリ、サンカク、サンカクボシ、シハンコ、カクマキ 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）</p>
 <p>みのぼうし 蓑帽子</p>	<p>頭部から身体にかけて覆う雪除け、防寒用の被り物。主に雪国で用いられた。藁や蔦草、ススキなどを細長く編んで二つ折りにし、片側だけを閉じたものや、半球状の鉢の下を綴（しころ）のように編み残したものなどがある。</p>	<p>【ぼうし】 ござぼうし・みのぼうし・かんぜんぼうし・くちえぼうし・ゆきかぶと 以上、『日本の生活文化財』（祝宮静編）</p>
<p>かさ 笠</p>	<p>雨除け、雪除け、日除け、または顔をかくすための被りもの。製法で大別すると、編み笠（蔦草や稲藁などを編む）、組み笠（檜や竹などを網代に組む）、縫い笠（菅、麦秆など）、押え笠（竹皮や蒲葵など）、張り笠（皮、紙など）、塗り笠（洗、漆、油などを塗った）などがある。</p>	<p>【笠】 うちぶせ・ばちがさ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【笠】 くばーさ・ちんぶがさ・ばちよーがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 <p>あみがさ 編笠</p>	<p>蔦草・稲藁などを編んでつくった笠。もっぱら陽笠に用いられた。深編笠（熊谷笠・十符編笠・忍笠）、一文字、富士嵐、虚無僧笠（菰僧笠・天蓋）などの種類がある。</p>	<p>【編笠】 とくまぼ・とこまぼ・ぼおり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 <p>すげがさ 菅笠</p>	<p>縫い笠の一種。スゲを縫い綴って作った笠で晴雨兼用。円盤形・円錐形・円錐台形・帽子形・半円球形・複折形など、主に七種の型がある。</p>	<p>【菅笠】 さんどがさ・そーとめがさ・ゆきずりがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 <p>ひのきがさ 檜笠</p>	<p>組み笠の一種。桧などの経木を材料とし、網代に組んで作ったもの。網代笠ともいう。杉・松・イチイなども用いる。</p>	<p>【檜笠】 ヒノキガサ、アジロガサ、イタガサ、カスカガサ、キセンガサ、キョウジャガサ、サクラドメ、チョツペイガサ、ドウタニガサ、ヒノキタマ、ゲキガサ、以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）</p>
 <p>たけかわがさ 竹皮笠</p>	<p>押え笠の一種。主として竹皮を材料とし、これを竹の骨組の上にかぶせ、糸・竹ヒゴなどで渦巻状に押さえ止めて形作る。円錐形・帽子形・半円球形・複折形・桔梗形などの型がある。</p>	<p>【竹子笠】 さんばち・さんばちがさ・じゃこがさ・じんばちがさ・たかっぱり・たかなぼんちよー・たからばち・たかなばち・たこーな・たごろばち・たんべら・でんばち・とんきゅーがさ・とんころがさ・ばちがさ・ばちがさ・びーびがさ・たかっぱりがさ・たつぱりがさ・ばちかーがさ・ばちばちがさ・ばつちがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
<b>着る物（上衣）</b>		
 <p>はれぎ 晴着</p>	<p>改まった日（晴：ハレ）に身につける衣服。普段着や仕事着（褌：ケ）と区別して用いる衣服。</p>	<p>【晴着】 アワセモンツキ・ワタイレモンツキ・アカバエ・イッチョオライ・ヨソイキ・シモユキ・ハレギ・ヨソユキ・イッチョウラ・ウウジ 以上、神野班収集</p>



名称	説明	さまざまな呼称
 <p>ふだんぎ 普段着</p>	<p>日常身につける衣服。農山漁村では家居の際に着用する衣服を指し、仕事着よりも身丈が長い「長着」をいい、ナガギ、ナガラなどという。仕事を終えた夜間や休みの日の家居に着る。</p>	<p>【不断着】 あいぎ・あいだぎ・あいまぎ・あわぎ・あわぎもん・あわいのきもの・いっせーちーあー・うまんぎり・おそいきもん・おぞいば・おぞいべい・かつぎ・きすたれ・けぎ・けぎもん・けない・けないぎ・けなき・けなげ・さしで・さまぎん・じゅじゅぎ・じよじよぎ・じよぎ・じよぎもん・じよぎり・じよじよぎ・じよじよぎ・じよじよぎ・じよじよぎ・じよじよぎ・ただくさぎ・ただんきもん・ちゆまい・ちよせき・ちよこちよこぎ・つねぎ・つねぎもん・つねつき・どうたてい・ながき・ながぎ・ながきもの・ながきもん・ねんぎ・はざぎ・はざらぎ・びさきしきん・びたきさぬ・びたすしぬ・ふたきしきん・ふたっししん・へーぜーぎ・へーぜご・へーでーぎ・へーじぎ・へじぎもん・へぜぎ・へびら・へべら・へんじよぎ・へんじよぎもん・まぎ・やーからー・やーからちやー・やーからきいらー・やぎ・ゆちゃー・ゆつあーま・んぬってい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p>
 <p>しごとぎ 仕事着</p>	<p>労働時に上体に身につける衣服。動きやすく丈夫で、汚れることを前提に作られたもの。仕立ては単・裕・綿入のほか、肩入・片身替・刺子・裂織などさまざま。一般に身丈は短く、コギン、コシキリ、ハンチャ、ミチカなどと呼ばれる。また袖形も変化に富み、ハンソデ、ヒラソデ、ツツソデ、ツツポ、モザリ、マキソデ、ネヂソデ、コイグチ、ブタグチ、コテソデ、テボソ、テッポウソデ、タナシ、ソデナシなど袖の特徴が名になっていることも多い。用途による名称では、農耕時に着るものをノラギ（野良着）、海に出る者の着るものをオキギモン（沖着物）、山に入る者の着るものをヤマギモン（山着物）などという。</p>	<p>【仕事着】 あいぎ・いご・いごき・うわっぱり・うわぱり・えわっぱり・えわぱり・おぞいきもん・かせぎいしょ・かせぎせだご・かちきしぼ・こいの・こぎの・こした・こしふとん・さしもの・しかまきぬ・しかましぬ・しくとうしきん・しごつきむん・しごときもん・しごとしぼん・しじきりやー・しぼん・しぼんきもの・しぼん・しりきりばんでん・しりきれ・しりきれしぼん・しりきればんでん・すかまきぬ・すていっきら・すていむたていー・そといきぎ・そとぎ・たいきぎもの・たなし・たんぼきもん・ちじれ・ちよーばき・ついびきさー・つすれ・つねぎ・でたち・でたち・でたちべ・てっぽ・てっぽそで・とーね・ながとは・のこぎぬ・のこぎん・のんなし・はざぎ・はたけぎ・はつび・はつふい・はまいきもん・はりかけ・はるまぎ・はんぞで・はんぢや・はんで・はんでん・ひっぱり・ひとえでっこー・ふしんきもの・ほっこ・まんてる・もじり・もっぱ・やまいき・やまいきぎもの・やまいきぎもん・やまいきもの・やまぎ・やまきもの・やまきもの・やまきもん・やまきもん・やましぼん・やますがた・やまつき・やまつきもの・やまでたち・やまみちか・やまゆき・やんだ・よたぎもの・わっぼろ・わはり・わんぱりいしょ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【仕事着・労働着】 こしぎり・こしきん・こすびり・こでなし・しかまきぬ・たなし・つずり・でたちべ・どんざ・はざぎ・はるぎん・ひっぱり・ふしんぎもの・やまいき・やまぼど・ぞんざ 【沖着物】 いそ・おきあわせ・おきぞんざ・おわんだきもん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>そでなし 袖無</p>	<p>着物の一種で袖のないもの。胴だけをおおう最少の衣服。肌襦袢、半纏、羽織、仕事着など用途はさまざま。防寒用の綿入れのほか、冬以外に着る綿を入れないものもある。数多くの呼称があるが、なかでも袖無の仕事着はタナシ・ソデナシ・カタギン・カンキ・ツヌキなどと呼ばれる。</p>	<p>【袖無しの半纏】 おちやっぱり・おちやっぱり・おでんち・でんこ・でんこ・でんこー・でんじ・でんじん・でんじん・でんぢや・でんぢゆ・でんぢゆー・でんぢよ・でんぢん・でんつ・どーば・はつび・ひつちよい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【袖無衣】 あくひ・かつこ・かんき・かんきち・かんちよ・さる・さるこ・しよっこ・せなこ・ちんこ・てんこ・どーまり・はんこ・ほいしん・ほーちん・ほんしん・ほんちん・かんこ・しよいこ・じんでこ・ててらしゅばん・でんち・どーまる・どんだ・どんまる・ひつちよい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>ぼろきもの 襦袢着物</p>	<p>破れや繕いのあるぼろぼろの着物。仕事着と重なる名称も多い。</p>	<p>【襦袢の着物】 おかざり・おびらめ・おぼろさんぼろ・きくずし・さんぼろ・さんぼろさんぼろ・しとね・せんまいわた・せんぼろ・つずり・つずりきもの・つすれ・どんざー・どんざー・どーじ・どーじくた・どほー・どんざ・どんざきもん・どんざぼろ・どんざぼろ・どんだ・ばれん・びたたいじん・ほーこ・ほーた・ほーたくきもん・ほーと・ほこきもの・ぼた・ぼたら・ぼたれ・ぼたれ・ぼたれつきもの・ほっこ・ほっこ・ほっこー・ほっこきもの・ほった・ほたら・ほつと・ほと・ぼろくそ・ぼろそ・ぼろっこ・ぼろろ・ほんざ・ほんぜー・ほんぼろ・もっこ・もっぱ・やりかーふ・やりかこー・やりきん・やりじん・よいえしよ・わっぼろ・わんぱれ・わんぱれ・わんぱーたいじ 【使い古した布】 かーふ・かつこー・かこー・かつこ・かつさい・ごっせ・こんざ・こんざんぼろ・こんずんぼろ・こんぞ・さいで・しきしじぶ・ずーじよー・ぞんざ・つき・つきぼろ・つずい・つずら・つずり・つずりぼろ・つすれ・つすれぎれ・つすれぼろ・つずろ・つれつけ・つんぎれ・つんず・つんずぎれ・つんずり・つんずれ・つんぼろ・とざい・ときま・どや・とんざ・とんさ・とんざ・とんざぶろー・とんざぼろ・とんざぼろー・どんだ・びろー・ふいとー・ふーとー・ふーとろ・ふくたー・ふた・ほーたく・ほーろく・ぼた・ぼたこ・ぼたら・ぼつ・ぼつぎえ・ぼつぜ・ぼった・ぼたら・ほつと・ほと・ほどー・ほどろ・ぼろくそ・ぼろそ・ぼろつき・ぼろっこ・ぼろろ・ほんざ・ほんぜー・ほんぼろ・むくぞ・もぎ・やふれつづろ・やれつき・やれつづぎ（※使い古した布の意） 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p>
 <p>ゆかた 浴衣</p>	<p>主に夏の湯上がりや普段着として用いる上下一体型、裏地無し（単仕立）の着物。もとは麻の単衣で、入浴時や入浴後に着用した湯帷子が始まりといわれる。</p>	<p>【浴衣】 じゅばん・そめぬき・はらぎ・ひらくち・もーか・ゆあがい・ゆあがり・ゆとり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【浴衣】 じゅばん・もーか・ゆとり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>

衣

名称	説明	さまざまな呼称
 ねまき 寝巻	寝間着とも書く。就寝時に身につける衣服。着古した浴衣なども用いられた。	<b>【寝巻】</b> かいまき・たんぜん・ねあわせ・ねいしょ・ねいそ・ねいしょ・ねき・ねき・ねきむの・ねぎもの・ねぎよき・ねぎりもん・ねば・ねもくい・ねまぎ・ねんねば・ねんねんぎ・ゆるち・よぎ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【寝衣】</b> ねもくい・ねんねば・よかぶり・かいまき・ねいしょ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 じゅばん 襦袢	和装の際、表着の下に着用する下着の総称、または仕事着の上着（表着）の呼称としても使われる。ポルトガル語でシャツを意味する「ジバオ」が語源とされる。上下一体の長襦袢は衿に汚れ除けの半襟をつけて表着と肌襦袢の間に着る。半襦袢は肌襦袢と同じ半身衣だが、衿に汚れ除けの半襟をつけ、長襦袢同様に用いられる。胴が木綿、袖が絹など、別の素材で作られることも多い。	<b>【襦袢】</b> おひよ・こて・こんなし・しだひきゃー・しりきれ・しんべ・どんざ・どんじ・はたづけ・はんぎ・はんこ・ばんこ・ばんご 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【襦袢】</b> てら・どんざ・はだこ・はだつけ・むんずり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はだじゅばん 肌襦袢	肌に直接着用する下着。袖のある半身衣で汗取りなどとも呼ばれ、晒木綿などで作られる。	<b>【肌着】</b> あかとり・あせとり・あせはじき・かやまき・くから・こんなし・ちゃんちゃん・つぼこ・つぼこ・どうしふい・ねこ・はざこ・はだこ・はだこじばん・はだっこ・はらっこ・はんたこ・はんちゃ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 うわぎ 上着	衣服の上に羽織るものの総称。羽織、上っ張り、半纏、道行、道中着などさまざまな種類があり、主用途は防寒や塵除けだが、文字や図案を染め、職業や所属を表す目印にするなどの目的もある。	<b>【上着】</b> おんぎん・しんべ・ずぶり・ひっぱり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 はおり 羽織	上着の一種。長着の上に羽織る折衿の短衣。外出時や改まった席で着用。明治以降、袴に代って紋付羽織・袴が男子の正装と定められ一般に広がった。飾り紐で前を結び、前開きから下の着衣が見える仕立て。	<b>【羽織】</b> うわぶり・えりおり・おはお・すっぽー・どーぶく・とーぶく・どーぶく・はあ・はぐい・はぐり・はこり・はこり・はこり・ばつたぐ・ばばら・ばばら・はんちく・るーぶく <b>【羽織（羽織の古称）】</b> どんこ・どんこ・どんざ・どんせー・どんた 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【羽織】</b> うわぶり・えりおり・ばばら・はこり <b>【縮入羽織】</b> どーぶく・どんぶく 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はんてん 半纏	上着の一種。衣服の上に羽織る短い上着。仕事や防寒、または両者を兼ねて着用する。羽織と似ているが襟は折れず、前身ごろの左右を結ぶ紐がない。袖は筒袖か振袖が多く、近世後期になって出現した。  印半纏、ねんねこ半纏、縮入半纏などの種類がある。	<b>【半纏】</b> いわつぱり・うわつぱり・おだぼって・けんちゃ・こてつぽ・しばんこ・しりきれ・しんべ・しんべはん・すっぽ・だるま・ちゃん・てこ・てっこー・でんち・どーぎ・どーぶく・どーぶく・とーまる・どぶく・どんざ・どんぶく・はざり・はだこ・はち・はつび・はて・はんがわせ・はんきり・はんぎり・はんびりもの・ばんこ・はんこー・はんち・はんちや・はんちやー・はんちよー・はんてつ・はんと・はんたこ・はんぶく・はんぶく・へんてこ・みちがわせ・みつか・むきみや・よしち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【半纏】</b> こひふり・さんば・よしち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 しるしばんてん 印半纏	半纏の一種。仕事や防寒、または両者を兼ねて着用する。紺木綿の単衣または袷仕立てで、衿・背・肩・裾周りになどに、屋号や紋・組印・組名を白く染め抜く。筒袖で裾がなく腰丈程度。	<b>【印半纏】</b> かんばん・きりだい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ねんねこばんてん ねんねこ半纏	半纏の一種。子どもを背負うときに羽織る丈の長い綿入れの上着。	<b>【子供を背負った上に着る半纏】</b> かつこい・かつほい・からいばんてん・こいしばん・こいきもん・こいばんてん・こいまき・こおいはんちや・こんご・こんごい・こんごばおり・しよーといれ・せわ・せんが・せんたぶつ・やんこ <b>【子供を背負った上に着る縮入の半纏】</b> こもりどんぶく・こもんはんてん・ねんねこはおり・はんこ・はんたー・はんちや・ぶく <b>【子供を背負った上に掛ける縮入】</b> ありやこじや・かめつこ・かめつこ・こもりどぶく・こもんはんてん・たんでん・ねんねこはおり・はんこ・はんたー・はんちや・ぶく 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【子負半纏】</b> あわい・おいがけ・おいぎ・おいこ・おいね・おいのこ・かつこい・かつほい・からいばんてん・こもりどぶく・こんご・せんたぶつ・だんぶくろ・ひたこ・ぶく・おいこばんてん・せわ・ひたて 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 わたいはんてん 縮入半纏	半纏の一種。防寒のため表地と裏地の間に綿が縫いこまれている。	<b>【縮入】</b> おひえ・ずーののこ・とーじんこ・どーののこ・とーぶく・どーぶく・どぬのこ・どんこ・どんざ・どんざ・とんちん・どんちん・どんぶく・ばんぶー・ひらくち・ひらくち・ひろそで・ぶつぎきはんこ・まいずめ <b>【縮入の半纏】</b> おのこ・どーとく・どーぶく・どーぶく・どーぶく・ばんちや・どとくわたいり・どぶく・どんぶく・ぬのこ・ぬのこはんてん・のーのこ・のこ・のつこ・ののこ・ののこすっぽ・ののこはんてん・んのこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【縮入衣（わたいれ）】</b> ぬのこ・ののこ・うのど・おひえ・どてら <b>【縮入羽織】</b> どーぶく・どんぶく 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 たんぜん 丹前	湯上り（浴衣）の上や防寒用に羽織る広袖の綿入れで、関東では襦袢（どてら）という。着物のほか寝間着の上にも着た。	<b>【纏袍（どてら）】</b> 丹前 きたんぜん・こひろ・どぶく・どんざ・どんぶく・ねまき・ほと・もめんいしよー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）









名称	説明	さまざまな呼称
みちゆき道行	和装の上に着る外套の一種で女性用。防寒と防塵のため衿元以外をすっぽり覆い、おもに道中着とした。	
 どんざ	厚手の防寒用の衣服。厚地の木綿でできた半纏や木綿を重ねた刺子半纏や筒袖の仕事着など、実体はさまざま。ツツレやアツシ(厚子・厚司)と呼ぶところもある。アイヌがオヒョウの樹皮から織ったアットゥシとの関連は不明。	
 みの蓑	植物繊維を編んで作った防寒、防風雨、防雪、日除け用の外套。腰蓑や肩蓑など体の一部を覆うものもある。稲藁・スゲ・ビロウの葉やシナ・フジ・シュロの皮などを編んで作った服物で、主として雨雪を防ぎ陽光をささげるために着用するほか、水にぬれたり泥土に汚れるのを防いだり、物資の運搬時のクッションなどにも利用。	【蓑】 がさ・けだい・けてー・つら・どーみの・どみの・どもんこ・のーさ・ばんどり・ぼーりよー・みだら・めぬさ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 きごぞ 着莫座	植物繊維を編んで作った防寒、防風雨、防雪、日除け着。莫座に肩掛け紐をつけ、外出着とした。莫座を横にして背に負うものは農作業の日除けに、縦に用いて体を包むものは雨や雪除けに使用されることが多い。キダラ・キゴモ・オイネガツパ、ヒミノ・ヒデリゴザ、セグラなどによぶ地方もある。	【藁草または藁を編んで作った雨具】 ごさぶし・ごさぼーし・ごさぼし・ごさみの・ごさむしろ・こもそ 【藁で作った雨具】 みのはし・みのすっこ・みのすこ・わらぼし 【茅や菅、わらなどで編んだ、フード付きマントの形をした雨や雪の日のカッパ】 みのはし・みのぼーす・みのぼし・みのぼっち 【夏の日覆いに農夫が背中に付ける小さいもの】 てしまごぞ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【蓑】 きごも・とんびごぞ・ひよけ・よこて 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 かつば 合羽	外套の一種。布や紙製で肩に掛け、首で結んで着用する。形式は丸合羽が多く、紙に桐油をぬった紙合羽、油紙を芯にした木綿仕立ての木綿合羽は主に旅人たちの雨着とされた。	【かつば】 かいろう・かざまわし・かつばぎ・からす・とゆー・とゆー・とよ・とい・といがっぱ・ひきまわし・ひきまき・ひきまし・ひきまつい・まる・まる・まわしかっぱ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【雨合羽】 あまばおり・じゅーりがっぱ・とい・みのはし・もめんがっぱ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 とんび	外套の一種。明治以降、合羽に変わって重宝され、トンビ、インパネス、二重マントなどと呼ばれた。	【マント】 つる・ひきまわし・ひきまき 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 かくまき 角巻	外套の一種。房のついた毛布の類で、頭や肩から掛けて全身を覆う厚手の布。マントのように着装する。	【角巻】 フランケ、ケット、以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本馨太郎)
着る物(下衣)		
 はかま 袴	両脚の部分が二股に分かれた下衣。単に「袴」という場合、羽織と並ぶ男子の和服礼装のひとつを指すことが多く、上衣の裾を着籠めてゆったりと下半身を覆う。その他、小倉袴、馬乗袴、行灯袴、山袴(仕事袴)、洋袴(ズボン)、下袴(ももひき)など、用途によりさまざまな形態がある。	【袴】 いんぎんぶくろ・ざばかま・さらっぱかま・しもすそ・ぞそ・ましたか・まちさか・まちたか・まちだか・またたか 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【袴】 いんぎんぶくろ・しも・じんぎぶくろ・まちだか・いんぎぶくろ・すそ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
<b>やまばかま 山袴</b>	袴の一種で一群の地方的な袴の総称。現在正装に際して着用される座敷袴に対し、地方農山村などで日常生活、または農耕その他の作業に際して着用。タチツケ・モンペ・カルサン・ユキバカマ・サルバカマ・フンゴミなどと呼ばれる。	【山行きの袴】 いっかま・えったくた・えったくた・えんざくざ・おーくちばかま・おーくちばかま・かつたち・ののばかま・のばかま・のらばかま・まちだか・ゆきばかま・よきばかま 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【山袴】 えったくた・おんぐり・かかとさん・かるさん・こばかま・こみこみ・さんばく・たつつけ・だんぶくろ・ふんごみ・へが・ほんばかま・またしやれ・もくたれ・うんぐり 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 たつつけ 裁着	山袴の一種。四布型で後布がきわめて短小。膝下の部分が一布であり、もっぱら方形箱(はこまち)であるのが特徴。腰はゆるやかで膝下がぴったりしており、現在も相撲の呼出や芸者の手古舞姿などに見ることができる。	【作業袴】 うまのりばかま・おっぱらばかま・さる・さんどく・たじつけ・たすけ・たちつけ・たちつけ・たちばかま・たつき・たつきばかま・たつけ・たち・たつつけ・たつび・むくずり・むくたれ・もくずれ・むたくれ・もくたり・もくたれ・もつべ・もつべー・もんべ・もんべー 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)
 もんぺ	山袴の一種。左右一対の前布・後布から構成される。後布の短小なタツツケから、長大となるカルサンへの中間に位置する。仕立てがゆるやかなので長着物のままでも装着できる。第二次大戦中に家庭婦人の防空着・作業着として婦人団体が大いに奨励し、広く全国に普及した。	【もんぺ】 あねこもつべ・いっかま・えちやまか・かかとさん・かつさん・がふら・からさん・かりさん・かるさん・さるこばかま・さるばかま・さるまた・さんとく・たちあげ・たちかけ・だふら・だんぶくろ・ののばかま・のばかま・のらばかま・はかま・へが・へば・またしやれ・またしやれ・まっくれ・まっくれ・むこむこ・やえんばかま・ゆきばかま・よきばかま 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)
 かるさん 軽衫	山袴の一種。タツツケやモンペに比べ、後布がたつぷりとなっている。すそにひだをとってくり、横ぎれの筒状の裾縫いをつけるのを特徴とする。古くは括袴(くりばかま)といわれたが、安土桃山時代ごろから「かるさん(軽衫)」の名で呼ばれた。	【上部を緩やかに、下部を締めた、労働用、あるいは防寒用の袴】 かつさん・からさん・かりさん・かるさん・さんばく・もつこもつこ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【カルサン】 カシラン・カッサン・カラサン・カリサ・カリサン・カルサ・カルソ・カンサンなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本馨太郎)

名称	説明	さまざまな呼称
 <p>ももひき 股引</p>	<p>両脚の部分が二股に分かれた下衣。山袴のような後腰はないが、左右の前布の筒部にそれぞれ足を通し、右後布を下に、左後布を上重ねて臀部を包み、紐を結んで着装する。男性用の下着のほか、野良仕事の際に女性が着用する表着としてのモモヒキもあった。関西では丈の長いものをパッチ、作業用の丈の短いものをモモヒキといい、関東では縮緬や絹製のものをパッチ、木綿製を素材に限らずモモヒキと呼んだ。</p>	<p>【股引】 あしく・あつぷ・いんぐりまた・おじんぱち・こした・さるまた・じんたら・ばー・はがま・はだももひき・ばち・ぱち・ぱち・ぱち・ぱち・ぱちり・ふみごみ・ふごみ・ふみご・ふんぐみ・ふんごみ・ふんぼり・べっち・まわせ・むむぬき・むむぬし・むむぬち・もつけ・もっぺ・ももざい・もんぐら・もんべ・もんべ・わっち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【股引】 あつぷ・いんぐりまた・ふみご・じんたら・ふんごみ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>こしまき 腰巻</p>	<p>着物の内に着装し、腰部に巻きつける布片的な下衣で、主に女性用の下着。作業時に用いることもある。蹴出・裾除などとし、湯文字・二布の表に着装した。現在は湯文字や都腰巻なども包含して、婦人の腰部にまとう服物の総称となっている。「オコシ（お腰）」は丁寧に上品な呼称。</p>	<p>【腰巻】 おなごへこ・おなごんへこ・おへこ・おやっぼ・おんなのふんどし・かいまき・こしま・ごんま・こしまえ・したのおび・したのび・しためだれ・ひためだれ・しめし・すぞいき・すぞよけ・たずな・つりりまーし・とーさぎ・なか・なかね・はだのおび・はもじ・ひごめ・ひまき・ひも・ふんどし・ふんどし・へけ・へこ・べっち・へんどし・まき・まはし・みみぬい・みんみ・めだれ【女性の腰巻】 あん・いとり・いまき・えとり・えまき・きゃふ・おゆく・おゆまき・きゃーふ・きゃく・きゃふ・きゃほ・したいぼ・したしほ・したへぼ・したむん・したもん・したんもん・そぞひき・ちゃっぼ・はだすい・はだせ・はだぞ・はだぞえ・ひたんもん・めんな・ゆく・ゆとり・ゆまき・よこ・よとり・よまき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【腰巻・湯巻】 えとり・おやっぼ・かーむ・かいまき・かかん・きゃく・きゃふ・けだし・こしまえ・したへぼ・しためだれ・したもん・すぞいき・ちりまーし・なかね・はだぞえ・ひごめ・ひためだれ・ふごめ・ふたの・ふんどし・へこ・まき・みみぬい・めーちゃ・めだれ・ゆく・ゆのもの・よまき・おきゃふ・とーさぎ・はもじ・はらそ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
<p>ふんどし 褌</p>	<p>男性の股間を覆う下着。一連の帯状の布片で、股間から腰部に巻きつけて着装する。六尺褌、越中褌、もっこ褌などの種類がある。</p>	<p>【褌】 いまき・うちおび・おとこゆもじ・きんかくし・けつわり・けつわりきんかくし・こばかま・さげ・さない・さなき・さなじ（単称）・さなん・さねー・さねん・さんじゃく・さんじゃくおび・したのおび・したのび・したもん・したゆで・しりまき・たずな・たんな・だんな・ちべこ・ついだんな・つりさなき・つつさぎー・つつべこ・つりふ・つりふごめ・てこ・てっこ・ててら・はたおび・はたのおび・はたのび・はたのび・はたのふ・はたのおび・はたなんおび・はどーび・はらのおび・ひごめ・ひたのおび・ひたのび・ふごめ・ふんごめ・へこ・へこおび・へこ・ぼすぼー・ほんごめ・まーひ・まおし・まし・まつし・まやし・まわし・まわしふんどし・ろくしゃくべこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【褌】 うちおび・きんかくし・こしまき・こばかま・さない・さなき・さなじ・さねー・さるももひき・したゆで・たふさぎ・たんな・てこ・ててら・とーさぎ・ねじまわし・はたのび・ふごめ・ふたの・ふんごめ・へこ・へこし・まわし・もっこ・たふさぎ・はたおび・はたよび・はどーび・ひごめ・まわし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>ろくしゃくふんどし 六尺褌</p>	<p>「褌」の一種。並幅の布を6尺（鯨尺で、約230cm）ほどに切ったもので、略して「ろくしゃく」などと呼ばれる。農村や漁村では、第二次大戦まで男性のふつうの下着で、これひとつを身につけて仕事をすることも多かった。</p>	
 <p>えちゅうふんどし 越中褌</p>	<p>「褌」の一種。3尺（鯨尺、約114cm）ほどの布に紐をつけ、紐を腰に巻いてうしろから股を覆い、紐の下をくぐらせて余った分を前に垂らして着装する。越中褌をもっと簡略にし、陰部を覆うだけの布を用い、脇腹で結ぶもっこふんどしもある。</p>	<p>【越中褌】 いーさない・えどべこ・おりべふんどし・おろっぺふんどし・さなき・ちりさなき・つつべこ・ひっこみふんどし・むせ・もっこ・もっこふんどし・やっちらべこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編） 【越中褌】 ツイダンナ・ツリフコメ・ムソ・イターシー・スコシ・ドモコウなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）</p>
着る物（その他）		
 <p>おび 帯</p>	<p>幅が狭く丈の長い一筋の服物の総称。帯を巻き結ぶことで、着物の前を押える役割がある。男帯には角帯・兵児帯・三尺など、女帯には幅広帯・半幅帯・単帯・丸帯・袋帯・昼夜帯・名古屋帯・伊達巻などがある。</p>	<p>【帯】 おつぼ・おもじ・ききび・ききゆふ・きび・きゅーび・きゅび・さじ・しくび・しごき・すなおび・たずな・たんな・ちちゆび・ててら・どん・び（幼児語）・びー・びくい・びくん・ひごき・ひっこき・ぶーし・ふくび・ぶくび・ぶし・ぼーし・ぼし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【帯】 きび・さじ・しくび・たずな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>ちゅうやおび 昼夜帯</p>	<p>女性用の帯の一種。表と裏とがそれぞれに地質・色目・文様を異にしたもので、片側帯、腹合帯、鯨帯ともいう。お太鼓やひっかけなどに結び、もっぱら平常用。</p>	<p>【腹合せ帯】 うちあわせ・ふつかおび 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【昼夜帯】 カタガワオビ、ハラアワセオビ、クジラオビなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）</p>
 <p>ばろおび 襤褸帯</p>	<p>帯の一種で、野良着・仕事着用。ごつごつとした裂き織りなどで作られ、結び目が解けにくい。</p>	












名称	説明	さまざまな呼称
 こしひも 腰紐	帯の類で帯よりも量的に細く小さいものは紐とも呼ばれ、腰紐(腰帯)・帯揚・帯留などがある。腰紐は裾を上げて着丈を調節し、着物の打ち合わせを留めるために締める。	【腰紐・腰帯】 おびし・かかえおび・からげ・くりあげ・しき・すしよー・たんな・はしよーおび 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
 へこおび 兵児帯	縮緬や絞りなどの柔らかい生地をしごいて締める幅広の帯。普段着の着流しに着用。薩摩兵児が締めていたのが名の由来とされる。	【へこ帯】 たくり・ながてのこい・ひすごき・ひっごき・ひろで・ぼーし・すくいうーび・ぶーし 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
たすき 褌	着物の袖が作業の邪魔にならないように押さえる紐。一端を口に加え、脇の下から背にかけて8の字を描きながら袂をからげたり、両端を結んで輪にしたあと肩から脇へ斜めに「片たすき」にするなど、着装法はさまざま。	【褌】 あじまき・あじゃまき・ごがつだすき・たちこ・たんこ・ゆだすき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)
 うでぬき 腕貴	二の腕に装着し、手腕の活動を軽快にし、装飾や保護の役割を果たす。腕に巻いて紐またはコハゼでとめるものと、腕を通す筒形のものなどがあり、昆虫や茨の害を避けるほか、陽除け、汗除けにもなる。	【腕貴】 ウデヌキ・ナガテオ・テヌキ・ユガケなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本馨太郎)
 てっこう 手甲	手の甲および腕の覆い。もっぱら屋外の労働に際して外傷・寒気・日射を避けるために用いる。	【手甲】 いがけ・こーかけ・てーなー・ておい・てこほし・てさし・てだぬき・てっか・てっこ・てっかいし 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
てぶくろ 手袋	手部の覆い。手甲とひと続きになったものもあり、形態上からも呼称からも、手甲と手袋の区別は難しい。親指とその他の指とが二股に分かれるものと、五本指が独立したものとがある。	【手袋】 うでぬき・ていぬしー・ていぬす・てさし・てずつ・てつづ・てっか・てっかえし・てっこ・てっぼめ・てとー・てどーら・てぬき・てび・てべ・てはい・てぼーし・てぼっか・てわら・てんぼ・てんぼ・てんぼ・ゆびぬき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【手袋】 いびぬき・うでぬき・てぐつ・てずつ・てっこ・てつづ・てぬき・てぼーし 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
えりまき 襟巻	首周りを保護するためにつける覆い。主に防寒などの目的で首に巻く。一般には毛皮、布地、編み物の長襟巻をさすが、広くは頭から首を覆う毛唐(けつとう)や、首から肩を覆う角巻(かくまき)など、風呂敷状のものも含まれる。長襟巻が用いられるようになったのは明治に入ってから。	【襟巻】 えりもくい・えりもつり・くーまき・くびまき・くびまき・くびまく・くびまくい・くびもくい・くびもつり・くふまき・くるまき・くんびり・くんまき・しかんまき(薄い色絹を三角形に折って首に巻きつける襟巻)・ひきまくい・ひきまくり・ひるまく・ふびまき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【襟巻】 しかんまき 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
せあて 背当	農作業などの労働の際、背中につける衣類をいう。羽織ると直射日光が遮られ、涼しく感じることから日除けとしても用いられる。運搬用の背当とは別。	
 むねあて 胸当	胸から腹にかけての覆い。腹掛(はらがけ)ともいい、仕事、胸から腹を保護するために着けた。前に大きな袋がついているものもある。	【腹掛】 したつ・すたつ・ちがけ・はらて 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
 まえかけ 前掛	体の前面の覆い。衣服の汚れを防ぐため下体の表に装着する。古くは前垂(まえだれ)と呼ばれた。一般に一幅の布帛に紐を付けて作るが、地方によっては二幅・三幅・四幅など幅広のものもある。	【前掛】 おさかや・かいかけ・ひじゃで・ひんじゃで・まいあち・まいか・まいかー・まいき・まいめだれ・まえめだえ・まえめだれ・まえあて・まえて・まえふい・まえぶり・まえぶりこ・まやで・むなかけ・むなかけ・むなかけまえかけ・むなやまで・むらかけ・めぶる 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【前垂・前掛】 まいき・まえあて・まえぶり・めだれ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
 こしみの 腰蓑	蓑の一種で、腰部を保護する覆い。一般に長方形に編まれた蓑を胴部・腰部に巻き、その両端上部に付けた紐を結んで装着する。	
 しりあて 尻当	野良仕事や山仕事の際に腰につけ、休憩時に尻の下に敷く。座布団状のもの、襦袢を縫い合わせたもの、毛皮などがある。	
 はばき 脛巾	脛部に装着する覆い。中世以降に脚絆の語があらわれ、西日本では脚絆のみを使い、本州中央部では同義のものとして併用、東北日本では布帛を縫ったものが脚絆、植物の茎葉を編んだものが脛巾とされる。	
 きゃはん 脚絆	脛部に装着する覆い。中世以降、脛巾に代わって使われるようになった。	






名称	説明	さまざまな呼称
履き物		
 げた 下駄	木製の台部に鼻緒をすげ、足指で挟んで履く鼻緒履物類の総称。一般に歯と呼ばれる脚がつく。日常に履かれるほか、田下駄や海苔下駄のように仕事道具としての下駄もある。	【下駄】あしぎゃ・あしざ・あしじゃ・あした・あしつあ・あちだ・あつさ・あつしゃー・あつあ・あまげた・あまほくり・あんこ・かこい・かたん・がたん・からんこ・けたっこー・げんげ・げんげー・げんげん・こっこ・こつぱり・ごめん・ごんごん・こんば・さいばんげた・さしげた・しかん・ぞりこ・ちゃんちゃん・つまかけ・ぼっか・ひだり・びっか・ひらか・ひらかー・ひらこ・ひらつき・ひしゃつき・ぶくり・へらか・へらこ・ほーくり・ほくり・ほくり・ほこ・ほこり・ほっくり以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 たかげた 高下駄	下駄の一種で高さがあるもの。歯が交換できる「差歯」のつくり。北海道から中部までは足駄（下駄の古称）という。江戸では差歯の高いものを足駄、低いものは差歯も一木作りも区別なく下駄と呼んだが、京阪地方では足駄の語が廃れ、高下駄と呼ばれた。	【高下駄】すしげた 【差し歯の高下駄】たちばーあしじゃ 【歯の高い下駄】あしげた・さいげた・さしげた・さした・さしは・さしば・さしば・さしはま・さしはまげた・さしぶくり・さしほーくり・さしほつくり・さしほくり・さしほつくり・さししゃま・さつげた・さしはま・しゃしはま・さんげた・たかざし・たかたかげた・たかたし・たかは・たかば・たかば・たかはま・たかぶくー・たかぶくり・たかぶくれ・たかぶくろ・たかへらか・たかほー・たかほくり・たかほこり・たかほつくり・たかかんば・たかかんば・はまげた・ぶくり・ぶくり・ぶつくい・ほーくり・ほくい・ほくー・ほくり・ほくり・ほつくり・ほつくり・ほっこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【足駄】おーだか・けた・さしげた・さしば・さしはま・さしほくり・たかば・はげた・はまげた・ぶくり・ほくり・たかげた 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ひよりげた 日和下駄	差歯の低下駄。もっぱら晴天に用いられたが雨降りや小雨のときにも歩けることから重宝された。日和下駄に表をつけたものを吾妻（あづま）下駄という。	【歯の低い下駄】さしげた・じかばき・しきばき・しきばき・ひきつけ・ひつたらげた・ぶく・ぶくり・ぶつくりげた・ぶつくいげた・ほくり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 こまげた 駒下駄	下駄の一種で、一木作りになったもの。分類上、差歯に対し、歯と台座が一体となったつくりを「連歯下駄」という。	【駒下駄】あつはま・かっほげた・かんからげた・かんころげた・きりばんげた・じかばき・どーじま・ひきげた・ひきずり・ひきつけ・ひこずり・ひつきり・ひよりげた・ひらつか・ぶっかけ・まないたげた・きょこま・こーべげた・こんば・ひくけた 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ぞうり 草履	植物製繊維や布製で編むなどした柔らかな台に鼻緒をとりつけた鼻緒履物類の一種。足指で挟んで履く。	【草履】あか・あば・おにむし・げげ・げんげ・げんちよー・こんごー・さつばん・さば・さば・さばー・すりきり・はなぞーり・ふじくら・わづり・わらじ・わらじ・わらばきもの・わらんじゅ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【草履】あっぱ（児）・こんごー・さば・わらじ・わらばきもの 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 わらぞうり 藁草履	草履の一種。藁製。	
 あしなか 足半	足半草履ともいう。藁草履の一種で、足裏のなかばほどの大きさ。芯緒が鼻緒に利用されるのが特徴。	【かかとのない短小草履】あしだか・あしだかぞーり・あしなき・あしなこ・あしなこばき・あしなは・あしのこと・あしんだか・おなごぞーり・こんご・しりきれぞーり・ほつこじょーり・やまこ・やまじょい・やまじょり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 わらじ 草鞋	鼻緒履物類の一種。主に稲藁製。台と一緒に長い鼻緒が編み込まれ、足首に結びとめて固定する。足をのせる台とかかとを受け止めるカエシと着装のための紐と乳の4部からなる。	【草鞋】じわらじ・ふち・わらばきもの 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 わらぐつ 藁沓	足をのせる台部に、足の甲をおおう被甲部を造作した藁製履物の総称。主として雪中の労働や歩行時の防寒にはいた。	【藁沓】ごべ・さんよーでいす・しよぼけ・そーでーす・ふかくつ 【雪沓】うそ・うそかけ・うばくつ・えんぼ・おそふき・がんぐち・くさくつ・げんべ・こもくつ・こんごーくつ・こんぞー・こんべー・きーぐち・さんべー・しべ・しんべー・じんべー・すわり・つまご・つまみ・ねじかけ・ふかくつ・ふんきやげ・ふんごみ・もた・もつり・ゆずけ・よもたろー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 あさぐつ 浅沓	藁沓の一種で、履き込みの浅いもの。	
 ふかぐつ 深沓	藁沓の一種で、足首の上まで覆う深めのもの。	
 たび 足袋	親指と人差し指の間が二股に分かれた足覆い。指股があるので前鼻緒を挟むことができ、草履や下駄などと併用して用いられる。足袋のまま地面を歩くことを足袋はだしといい、専用の足袋ははだし足袋と呼ばれる。	【足袋】つまかけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 じかたび 直足袋	足袋の一種で屋外専用。底にゴムを圧着したり厚手の布地が縫いつけられ、他の履物を併用せず直接地面を歩く。	【ごも裏の足袋】くつたび・ふみこみ 【はだしたび・じかたび】たかじょー・つまがえ・つまがい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）

名称	説明	さまざまな呼称
 つまかわ 爪革	下駄や草履のつま先につける覆い。雨雪除け。	【爪革】つまあさ・つまか・つまぐつ・つまけ 【足駄の爪先に掛ける爪革】さきかわ・さきがわ・さっかわ 【下駄の爪革】さきがけ・はなかお・はながけ・はなかわ・はながわ・はなつかわ・むごがけ・むごがわ・むごがけ・むごがわ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【爪革】さきがけ・さきかわ・つまがけ・つまご・はながけ・はなかわ・むごがけ・むごがけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 つまかけ 爪掛	つま先につける防寒用の覆い。藁製や刺し子などがあり、草鞋にかかる労働用が多い。指股の分かれたものとなないものがある。	
こうがけ 甲掛	足の甲部に着装する覆い。素足に草鞋をはく際、草鞋の紐で足をすり傷めるのを防ぐために併用する。足袋の底を取り去ったような形態。	
かかとかけ 踵掛	足の踵につける覆い。	
 わかんじき 輪標	雪に踏み込まないように履物の下に装着する道具。深雪に埋まらず、雪で滑らない。木や竹を曲げて、輪にし、あるいは箕子状に並べて、その上に足を乗せる乗緒をつけ、さらに沓に結束する結緒をつけた。	
 てつかんじき 鉄標	標の一種で鉄製。雪氷上を歩行する際に、滑り止めのため履物の下に装着する。	
ふみだわら 踏俵	新雪を踏み固めて道をつけるのに用いる雪踏みの履物。稲藁やガマを円筒形の俵に編み、内底に藁沓や下駄・草履などを取りつけた。	
持ち物		
かさ 傘	雨や日差しをよけるために用いる柄付きの覆い。サシガサともカラカサともいう。	【傘】あまぶた 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【傘】さしがさ・さな・こんこ（兒） 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 あまがさ 雨傘	傘の一種で雨天用。日本の和傘は傘骨に和紙を張り、柿渋を塗って作った。子供用の三六（さぶろく）、番奴、番傘、蛇の目傘などの種類がある。	【雨傘】こっこ・さしがさ・さしがさ・とんやばり（大きなもの）・ばらばら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【こもり傘】かぶりさな・らんがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 つえ 杖	歩行の助けに携える細長い棒。堅くて丈夫な素材で作られる。	【杖】くーさに・くーさん・くーしゃん・くさねい・くさん・くしゃに・くしゃぬ・くしゃみ・くしゃん・せんぼー・ちーぼー・ちえーぼー・ちえばい・ちえぼー・ちえんぼー・ちえんば・ちえんばー・ちよぼー・ちんばい・つえつきぼー・つえつぼー・つえばい・つえぼー・つえぼー・つえんば・つえんばー・つえんぼー・つえんぼー・つれん・つれんぼー・つれんぼー・つえんぼー・つえんぼー・つきぼー・つুকぼー・つুকぼー・つきんぼー・つべ・つぼー・つよつぼー・つよのぼー・つよぼー・つよんぼー・つよんぼー・つれぼー・つんぼー・てぼー・てぼー・ぶくと・ぼーなー・ほきと・ほくと・ほくとー・われ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【杖】がさん・くさねい・くさみ・くさん・くしゃむ・こーしゃん・せんぼー・てぼー・ほくとー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
せんす 扇子	あおいで風を起し涼をとるために使う道具。末広ともいう。折り畳めるのが特徴で、折り畳み式の扇は日本で発明されたものとされる。	
 ふろしき 風呂敷	持ち物を包んだり、上から掛けたり、下敷きにするための布。手拭い同様、頭部の覆いとすることもある。	【風呂敷】いたん・うしび・うちゆき・うちゆくい・うちゆくいー・うちゆつきー・うつばい・うつー・うつくい・うつすい・うつちゆふい・うととつひ・うつばい・うつふい・うつふい・うちび・おーげんたるー・かげのかるしき・こつみ・ちじうすばい・つつみ・つつむ・つつめ・てーたん・てぶろしく・てぼろ・てゆーたん・ぼんかけ・ぼんかち・ひらいた・ひらいたん・ふくさ・ゆーたん・ゆたん・よたん・わんかけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【風呂敷】うちゆき・うつばい・おちよくいー・かげのてーたん・てぶろしき・ひらいたん・ゆーたん・ゆたん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 きんちゃく 巾着	口を紐で締めるようにした袋物。主として金銭を入れ、腰に提げた。丸形が多いが、形・大きさ・素材はさまざま。	【巾着】こぶくろ・こんぶくろ・だら・だらこ・つつみ・ふーづー・ふーぞー・ふぞー・ほーぞー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）








名称	説明	さまざまな呼称
 さいふ 財布	金銭・紙幣を入れておく袋。紐で首から下げたり、懐中にしまった。巾着、紙入、守袋、旅では小銭入の早道も利用され、明治以降は口金がついたがま口、西洋式の札入も広まった。	【財布】 かいちゆう・さんとく・じんふくる・じんぶくる・ぜせいれ・せにだら・ぜんふーず・ぜんぶーぞー・ぜんぶくろ・ぜんふぞ・たす・たばこいれ・たふ・どーらん・とつべ・とつべー・どんぶり・ひつき・ひっちゃん・ふーぞー・ふぞ・よいちべー・わんぐち 【布の財布】 じんきち・すすぶくろ・すすこんぶくろ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【財布】 さんところ・ぜんふぞ・どんぶり・よいちべー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
化粧・結髪		
 てかがみ 手鏡	男女の結髪・化粧に用いる柄のついた鏡。古来青銅製だったが、江戸末期に鏡面がガラス製となり、枠と柄が木製の鏡が作られるようになった。二つ対にして合わせ鏡にして用いることもある。	【鏡】 めいけい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 きょうだい 鏡台	鏡を立てる台。古くはカガミカケという。近世まで一般に、大小2個の木枠を組み合わせ、脚部を開いて鏡を置くものが用いられた。	【鏡台】 かみばこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 くし 櫛	髪をすいたり、整えたり、飾りにしたりする道具。	【櫛】 うつついー・さーき・さばき・さばきー・さばち・さばつくし・すいとーし・すじたて・すじとーし・すじやり 【長い柄のある櫛】 すいとし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【櫛】 さばき・さばち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 こうがい 笄	髪をまとめたり、髻に挿したりして用いる棒状の髪飾り。	【笄】 ほせ・よーがい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かざし 簪	女性用の髪飾り。古くは自然の草花をそのままさした。	【簪】 かんかん・ぎーば・ぎずーば・ぎは・ぎふあー・しーばー・とうんぐし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
みみだらい 耳盥	歯を黒く染めるための道具。お歯黒道具。お歯黒を染める液が苦いのでうがいをし、その水をあけるのに用いた。左右に耳状の手のついた盥で、多くは漆器であるが、銅製もある。	【耳盥】 はんぞー・みみだらい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 せっけんばこ 石鹸箱	石鹸を入れる容器。石鹸は明治以降に普及したものの。携帯用は蓋付き。	
 かみそり 剃刀	髪、ひげなどをそるのに使う小型の刃物。常片刃で刃は薄く、平面的できつさきがない。	【剃刀】 あたりがね・さかい・そい・そーり・そり・なめぼー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【剃刀】 そり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 つめきり 爪切	手や足の指の爪を切り整える道具。小形の鋏形のものや、爪の形に合わせて刃先に反りをもちせたものもある。	
 みみかき 耳搔	耳掃除の道具。耳垢を掻き取り、耳穴を掻くのに用いる。長い柄のついた極小の匙形のものや、柄の先に綿毛やネジ状のものをつけたものなどもある。	【耳搔具】 みみくじり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
洗濯・裁縫		
 せんたくいた 洗濯板	洗濯物をのせてこすり洗いをしたり、ブラシで叩いたりする台に使う板。明治期に入ってきた西洋洗濯の道具で、ガラス製のものもあるが多くは木製。片面は平面、もう片面に刻み目のあるもの、両面とも刻み目になっているものなどがある。	
 せんたくだらい 洗濯盥	洗濯物を入れて洗うための容器、大きめの盥。筆筒・長持・担桶（たご）・盥に数えられる花嫁道具のひとつ。盥には日常の食器を洗う桶、米研ぎ桶、魚洗い桶などがあり、洗うものによって大きさ、形が異なる。	【洗濯盥】 げし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はりいた 張板	洗って糊をつけた布帛を張り、乾かすのに用いる板。着物を解き、いったん布に戻して洗う洗濯法を洗い張りといい、最後の糊づけの際、布をびんとさせるために板に張った。麻や木綿、平織りの紬地などの洗い張りに用い、上質の絹ものでは使わない。一般に長さ2m・幅40cm・厚さ1.5cmほどの板が使われた。	

名称	説明	さまざまな呼称
 しんしばり 伸子針	染織や糊張りなどの際、布幅を引っ張り、均一に広げるための道具。 張り板を使った板張りに対し、伸子張りといい、上質な絹などで用いられた。竹ひごの両端に小さな針を埋め込んだ形状。伸子張りではまず、長い布の両端を張手という爪付きの板で挟み、紐で引っ張って棒や立ち木に括りつけて空中に張る。次に、布幅を均一に広げるため、この伸子を数多く、左右に弓を張るように差し渡す。	
ものほしざお 物干竿	物を干すための道具。衣類、洗濯物のほか、山菜、網類なども干す。棒状や鉤状などがあり、竿を掛ける股状の道具も使われる。	【物干竿】 かげそ・かげざお・からさお・からだけ・きもんほし・きもんほしざお・きんかけざお・きんかけぼー・きんざお 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【物干竿】 かげざお・からさお 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 せんたくばさみ 洗濯挟	布類を物干しに掛けて干すとき、風にあおられたり、何かのはずみで落ちないように留める道具。	
 おしめほし 襦袢干	上におしめをかけて干すドーム状の枠。こたつの上においたり、火鉢を中に入れたりして乾燥した。	
きぬた 砧	織った布または洗濯した布や着物をたたいてやわらかくし同時に目をつめて、つやをだすのに用いる道具。	【砧】 いたぶ・いたぶやま・うちばん・ぎんだし・じよーば・つち・てすち・てんころうち・ならしばん・よーしばん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ひのし 火熨斗	衣類などのしわを伸ばしたり、形を整えたりするのに用いる道具。 裁縫後や洗濯後の衣服の仕上げに使った。古くは、浅くて底の平らな金属製の円形火入れ容器に柄をつけたもので、これに炭火を入れて使用した。	【火熨斗】 うつとー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 アイロン	衣類などのしわを伸ばしたり、形を整えたりするのに用いる道具。 裁縫後や洗濯後の衣服の仕上げに使った。目的や使い方は火のしと同じだが、アイロンは英語の「鉄」が語源であり、明治時代に日本に入ってきた形状のものを指す。底が平らで先の尖った金属容器に熱源（炭火や電熱）を入れ、その熱で布などの皺や縫い目を伸ばす。	
 きりふき 霧吹	液体を霧状にして吹きかけるための道具。 水入れの上部の筒を口で吹いて散らすものや、電球状の胴に水を入れ上部を押すと霧が出るものなど、形状はさまざま。	
 くじらじゃく 鯨尺	裁縫用のものさし。鯨尺の1尺は約37.5cmで、曲尺の1尺2寸5分に相当する。	【鯨尺のものさし】 ごぶく・ごぶくものさし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
へらだい 笥台	裁縫用具。布帛をのせて笥筋をつけるのに用いる台または敷板。	
 くけへら 紵笥	和裁で寸法を標すのに用いる笥。先端に丸みをもたせた縦長の笥で、手に握り先を布に押しつけて擦るように標しをつける。	
 さいほうこて 裁縫鋺	縫代を割ったり、折山の始末をしたり、先端でへら印をつけたりするのに用いる鉄製の焼鋺。 火鉢の炭火などで鋺を熱し、あて布をしてあてた。一般に先細の平らな金属に長い柄をつけた形状。	
 たちいた 裁板	裁縫用具。布帛の笥つけ・裁断に用いる台。布を裁つときに用いる脚付きの台。	
 いとまき 糸巻	糸巻き。裁縫に用いる糸が乱れないように、また、使いやすいように巻いておくもの。長方形のなかほどをやや狭くした板。	
はり 針	布などを糸で縫い合わせるために使う道具。 一般に、先端がとがり、一端に糸を通す穴のある鋼製の小さな細い棒をいう。	【針】 いげ・しくしく・ちんのーいばーい・ちんのーやーばーい・はねがり・はねがね・はれがね・はねがれ・びず 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
はりやま 針山	使わない針を刺して収納する小座布団。 ボロや綿のほか、髪の毛を布で包んだものもある。髪の毛で針が錆びず、針通りがよくなった。	

名 称	説 明	さまざまな呼称
 ゆびぬき 指貫	裁縫用具。指にはめ、針の尻を押して縫い進めるために使う。	<b>【指貫】</b> うびんがに・うぶんがに・さらてかわ・さらてつか・しごとゆびわ・つまてつか・てか・てかわ・てつか・てつか一・てつかえし・てっこ・てぬき・ゆびがね・ゆびかわ・ゆびさし・ゆびはめ・ゆびわ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【指貫】</b> しごとゆびわ・てつか 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 くけだい 紵台	布がたるまないように布端を吊っておく道具。台板に棹を作り付けにしたもの、台板と棹とが折りたたみできるもの、台板に棹を差しはずしできるもの、裁縫箱をに棹を取り付け台の代わりにしたものなどがある。紵け台、針山紵台 など。	
 さいほうばこ 裁縫箱	裁縫に必要な道具を入れておく箱。上部に和裁に必要なくけ台を取り付けたものもある。主要な裁縫道具は、針・糸巻・指貫・笥・はさみなど。	<b>【針箱】</b> あまだい・あまむろ・はーさし・はりさし・はりさしはこ・はりぼんこ・はりやしめ・はーやしめ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【針箱】</b> あま <b>【裁縫箱】</b> ざもばこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）












名称	説明	さまざまな呼称
<b>食の用具</b>		
<b>長井亜弓</b>		
<b>貯蔵用具</b>		
 おけ 桶	木製円筒形の容器の総称。薄板を曲げて作った曲物桶や、細長い板を縦に並べてタガで締めて作った結桶がある。用途別に、鮭桶、餅桶、お櫃、行器、米研ぎ桶、漬物桶、酒仕込桶などがある。	【桶】 うーき・うーぎー・うき・おーげー・おけこがれ・おそ・こえたが・こが・しょべがが・たーぐ・たーんぐ・たが・たご・たごおけ・たんご・ふーき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【桶】 いー・かい・こが・そー・たが・たんご・とーご 【水桶】 こが・たんご・ちゃおけ・てたご・めーおけ・みずこが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 こめびつ 米櫃	米などの穀物を入れる容器。穀櫃とも。箱、樽、桶、甕など、容器の種類はさまざま。ケシネビツ（麩稲櫃）・カラト・コメブネ・ハンド・ハンマイビツ・リョウマイビツ・ゲビツなど呼び名も多数。	【米櫃】 からと・きし・きしねびつ・きしびつ・きつ・きつち・きつ・けしねびつ・げびつ・げぶつ・こがびつ・こめがらと・こめぶね・こめぼし・こめんあろ・せびつ・どーまい（どーまいびつ）・どーまいびつ・どーめ・どびつ・はんまいびつ・ひつ・よのげ・りよーまいびつ・ろーまいびつ・けしねびつ・どーみゃー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 めしびつ 飯櫃	炊き上がった飯を入れる容器。お櫃（おひつ）ともいう。塗物もあるが、一般に柾目に木取りした結桶で、通気性があり、適度に水分を吸収すると同時に保温の効果もあった。梅雨時から夏にかけては、蓋を編目ものに変えたり、より通気性の高い飯籠を利用した。また、冬は稲藁やガマで編んだお櫃入れに入れて保温性を高めた。	【飯櫃】 いーご・いご・ゆるわ・おっとし・おはんぼ・おめしつぎ・かごびつ・きしばち・ぎょべつ・くらがい・けびつ・ごろひつ・じきろ・そーない・つのはんぼ・はぎり・はんぎり・ばんぎり・はんぎれ・はんじゃー・はんたい・はんば・はんぼ・はんぼー・ひつ・べんとー・ぼーかい・ほかい・ほけい・ままつぎ・ままぶろ・みしばー・めつぎ・めつぎ・めしおけ・めしげ・めしつき・めしつぎ・めしつえ・めしつぎ・めしつぼ・めしばち・めしばつ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・めつぎ・ろーまいびつ・んばんぼつゐ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【飯櫃】 あまご・いご・いびつ・おつき・おっとし・おはんぼ・おひつ・ぎょべつ・くらがい・げびつ・じきろ・そーない・はんたい・はんぼ・ままつぎ・ままぶろ・めしばち・めしつぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 おひついれ お櫃入れ	飯櫃を保温する容器。乳幼児を入れておく容器にも同様なものを用いる地域が少なくなく、名称も同じ場合が多い。	【飯櫃保温具・おはちいれ】 いぐり・いさ・いずみ・ゆさ・ふご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 つりかご 吊籠	食物を入れて一時的に保存する吊るし籠。風通しがよく涼しい木陰や軒下などに吊るし、傷みを防いだ。昔の冷蔵庫代わり。米食地域では一般に炊いた飯を入れたが、沖縄などでは煮物などのおかずも入れて利用した。	【飯籠】 かごびつ・さげ・しーのー・そーき・そーけ・たかけ・ひたみ 【食物を入れて天井に吊るす籠】 おかもちかーご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 たる 樽	（食品や液体を）入れる、運ぶ、貯める、盛る、注ぐ、密閉する容器。鏡（かがみ）と呼ばれて蓋板が固着される。 醤油樽、酒樽、味噌樽、角樽、指樽、四斗樽 などがある。	
 さかだる 酒樽	樽の一種で、酒の保存や運搬に用いた。おもに大形の四斗樽（しとだる）が酒の輸送に使われ、化粧薦をつけたものを薦樽、薦被（こもかぶり）と呼んだ。	【酒樽】 やな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 つのだる 角樽	酒樽の一種。手提げの柄を角のように大きく作り、朱や黒漆などで塗った。祝儀の酒を贈る際に使用。祝儀用の酒樽には他に、指樽、兎樽などがある。	
 しょうゆだる 醤油樽	樽の一種で、醤油の保存や運搬に用いた。多くは酒樽の転用から始まった。	
 つぼ 壺	保存や運搬に使う容器で、胴部が丸く、口に向かってすぼまっていく形状。土製・陶磁製・金属製・ガラス製などがあり、素材や大きさはさまざま。茶壺、梅干壺、塩壺、油壺などさまざまな用途に用いられる。	【壺】 かがす・かがつ・ぐり・すず・ちよーくご・つぼぼ・ふくろ・ぼち・ぼっち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【壺】 かがつ・ぐり・ちよーくご・ぼち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ちゃつぼ 茶壺	壺の一種で、茶葉の貯蔵・運搬に用いられる。湿気を防ぐため、内側にも釉薬をかけ、外側には紙を張り巡らした。	【茶壺】 ちゃぐり・ちゃぼち・じじり 【挽いた茶をいれる器】 ちゃつぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かめ 甕	保存や運搬に使う容器で、壺と似た用途にも使われるが、口が大きく開き、下にいくに従ってすぼまっていく形状。頻繁に出し入れするものに利用される。水甕、味噌甕、醤油甕などさまざまな用途に使われる。	【甕（かめ）】 はんず・はんど・はんどー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【甕】 つぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
 みずがめ 水甕	甕の一種で、料理や飲用の水を貯えておく大きな容器。	【水をくみ入れて台所などに置く瓶】がめはんど・はんず・はんずーがめ・はんずがめ・はんと・はんど・ぼんどう・はんどう・はんどうーがみ・はんどうーがみ・はんどー・はんとーがめ・はんどーがめ・はんどかめ・はんどかめ・はんどつぼ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【水甕】かがす・はんず・はんど・はんどがめ・はんどつぼ・びさーみ・びしゃーみ・びそーみ・みずこが・みずつぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
みそがめ 味噌甕	甕の一種。味噌を小分けして日常使いにした。蓋付き。	
 しょうちゅうがめ 焼酎甕	甕の一種。焼酎の貯蔵・輸送などに使われた。肩が張り、上部に持ち手のついた独特な形状。	
びん 瓶	液体を入れる口の小さな細長い容器。一般に、「へい」と読む際は、金属製や陶磁器製のものを指し、「びん」と発音するときは特にガラス製のものをいう。  【大きさ】一升瓶、四合瓶、【用途】醤油瓶、酒瓶、ビール瓶、ラムネ瓶 など。	【瓶（びん）】かめつくり・かめんぼ・かめんぼー・くびん・しんじ・すす・すす・ちろり・つぼ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
いっしょうびん 一升瓶	おもに液体を入れるガラス製容器で、容量は1.8L。明治時代に酒瓶として普及し、みりんや醤油などの液体調味料を入れる容器として広まった。日光による変質を避けるため、茶色や緑色などのガラスが使われることが多い。戦時中は玄米を精米する米つき道具としても使われた。	【酒や醤油などを入れる瓶】うんすけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 せん 栓	口をふさぐ差し込み式の蓋。王冠、コルクなど、素材形態はさまざま。	【蓋】くさし・すさ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 こおりれいぞうこ 氷冷蔵庫	水の冷気を利用して食品を保存する箱。冷たい空気は下がる性質があるため、氷は上段に置く構造になっている。	冷蔵庫、冷蔵箱、冷蔵器、氷式冷蔵庫、木製冷蔵庫、ICE BOX 以上、長井壘弓
炊事用具		
 ひしゃく 柄杓	水など液体をくむ用具。 木・タケ・金属製などの浅い筒状の容器に柄をつけたもの、ひょうたんを割ったものなどがある。	
 ておけ 手桶	柄をつけた小形の桶。左右に渡したアーチ型の柄のものと、一本棒のついた片手桶とがある。	【片手桶】えつけ・かいげ・かいさし・かみずおけ・かたえ・かたちよー・くみだし・こがい・さるで・さるぼー・てぐり・てこがえ・てつけ・てんぼ・ひずみ・さるぼ・てんぐり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
こめどぎおけ 米研桶	洗桶（あらいおけ）の一種で、米研ぎ用。洗桶には他に食器洗い用や魚洗い用などがあり、洗うものによって大きさや形が異なり、使い分けた。	【米を研ぐ桶】かしおけ・かしげ・かしょーけ・かしょけ・がっしょけ・じょーず・てごおけ・ふみおけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【米をとぐ桶】かいさし・こしどけ・こたが・じょーず 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ざる 笊	広義には籠の一種とされ、おもに水切りに用いる編組品。多くは竹製で目の詰んだ莫塵目編みだが、籠目（六つ目）編みのものも目笊（めざる）と呼ばれるなど、籠と笊の境界ははっきりしない。	【笊】あふび・いかき・いかけ・いぎ・いぎり・いざーる・いざる（飯ざる）・いざろ・いじゃーる・いじゃーろ・いじゃる・いっかき・いっかけ・いとーり・いとーり・いびらき・いびらく・えべらく・うすき・えかき・えがき・ゆがき・えびら・えぶり・えぼ・かご・かんど・こえどり・こつべーざる・さいかかご・さいかかご・さどーし・さどし・ざらかご・しあく・したみ・しため・しゆけ・しょーき・しょーぎ・しょーけ・しょーげ・しょーけー・しょーけざる・じょーれん・ぞーれん・しょけ・しょげ・しんぐり・すまほこ・たんこ・ちりとーり・ちる・つーし・ていし・ていーる・ていり・ていーる・てご・てぼ・てぼかご・てんげー・どつべ・どつべふご・なえかご・はまがい・ひたみ・ひため・ひらく・ふぐ・ふご・ふごこ・ふござる・ふんぐり・ほご・ほごー・ぼつり・ほと・ぼでー・ほでこ・ほでこ・ほぼろ・まいらせ・までいる・まるかご・みかご・みそこしいかき・みそこしいかご・めーご・めかご・めご・やす・ゆがき・ゆかけ・ゆすぎ・ゆとーり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【笊】あじか・いかき・いぐり・いざる・いっかき・いどこ・いびらき・うすき・えぼ・かんど・くーす・さーき・したみ・しょーぎ・しょーけ・じょーれん・すんどり・そーき・そーけ・そーび・てすき・てつき・てつつき・てんこ・どつべ・どつべふご・ばーき・はまがい・はやもの・ひたみ・ひらぎ・ふご・ふんぐり・まざめ・みかご・ゆかけ・ゆすぎ・いかき・そーき・つーし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）











名称	説明	さまざまな呼称
なべ 鍋	<p>食物を煮たり、炒めたり、揚げたり、沸かししたり、炊いたりするための容器。多くは陶製や金属製。大きさや形態、用途などによりさまざまな種類がある。</p> <p>形の違いから、大鍋、中鍋、小鍋、深鍋、浅鍋、弦付鍋、内耳鍋。用途別に、中華鍋、汁鍋、粥鍋、ジンギスカン鍋、スキヤキ鍋。素材別に、鉄鍋、真鍮鍋、アルミ鍋、ホーロー鍋、ガラス鍋、土鍋、紙鍋。人名由来に、行平鍋（在原行平の故事から命名。雪平ともいう）などさまざまな種類がある。</p>	<p>【鍋】 おくろ・おくろもの・くろも・しゃはり・すし・すす・にんめーなびー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【鍋】 おくろ・くろもの・な 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 おおなべ 大鍋	鍋の一種。大きな鍋。	<p>【大きな鍋】 あしつる・おかま・おかまさん・かま・かまなべ・かんつき・じんなべ・しんめーなびー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【大鍋】 かんつき・さんめーなび・ほそり・あしつる 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 つるつきなべ 弦付鍋	鍋の一種。鉸付きの鍋。鉤に吊るして使用する。	
いりなべ 炒鍋	鍋の一種。食物を炒りつける。浅く平たい鍋。	
 ほろく 焙烙	炒り鍋の一種。食物を炒りつける。素焼きで皿状の鍋。	<p>【焙烙】 いりごら・かわら・こーさ・こーら・ことがわらけ・せんぱん・ちゃほーじ・てらし・ひらがま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 ごまいり 胡麻炒り	炒り鍋の一種。胡麻を炒る。炒った胡麻がはぜて飛び出さないよう工夫されている。	
めしたきなべ 飯焚き鍋	鍋の一種。飯炊き専用の鍋。	
 はがま 羽釜	釜の一種で、胴の周囲をとりまく鴈（羽）がある。炊飯や湯沸かしに用いる。	<p>【釜】 あつばー・えんなべ・かんす・とはん・なべ・ひらがま・ひらくち・やかん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【釜・飯炊釜】 つば・とはん・なべ・はがま・つばかま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 ちゃがま 茶釜	羽釜の一種で、湯茶を沸かす専用の釜。口部が小さい。	<p>【茶に使う湯を沸かす釜】 おかんす・かんし・かんす・かんすふる・かんそ・かんそー・ぶんぶく 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【茶釜】 おかんす・くわんす・てんどり・どんび・かんすふる・でーすがま・てんどり・ぶんぶく 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
 かまのふた 釜の蓋	釜の口を覆う蓋。	
 なべふた 鍋蓋	鍋の口を覆う蓋。	<p>【鍋の蓋】 うき・こぶた 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p>
 なべしき 鍋敷	鍋釜の敷物。釜敷ともいう。輪状に編んだり、箱状にすることで、底の丸い鍋釜を安定させた。底の平らな鍋を置く板状で穴のないものもある。	<p>【鍋敷】 おしき・しずい・しずえ・なびかぶち・なべざ・なべすけ・なべわ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【鍋敷】 しずい・わらだ 【釜敷き】 つきのわ・なべすけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>
なべつかみ 鍋掴み	熱い鍋釜を持つための道具。襦袢布を縫い合わせたり、植物繊維を編んだりして作った。	
しゃくし 杓子	飯や汁などをすくって飲食器に盛りつけるための道具。柄付き。ヘラ状または匙状。	<p>【杓子】 おきゃー・おっげんがえ・おてほ・おなおし・おへこ・おもどし・かいがら・かくみ・かくり・さいしんびら・さしびらー・さなげー・さんしんびら・さんまがり・しゃしゃびら・しゃっべ・ひっしゃくし・ふて・まがり・みやじま 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【杓子】 おなおし・かくみ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）</p>


名称	説明	さまざまな呼称
 しゃもじ 杓文字	飯を盛るためのしゃくし。飯しゃくし。柄の先端がへら状で、丸く平たい。	<b>【杓文字】</b> いーがい・いーぎや・いーげー・めしいーげー・いーじえー・いーもりじゃくし・いぎゃ・いびら・うのくび・おくもじ・おもどし・きな・さっべら・しゃつかい・ほんがい・ひら・ひらじゃくし・へら・まましやくし・まましやもじ・ままへら・みしがい・みしげ・みしげー・みしへ・めしいーがい・めしがい・めしぎや・めしぎやー・めしげ・めししゃくし・めしじゃくし・めししゃもじ・めしつぎ・めしとり・めしべら・めじゃくし・めっしゃくし・めっじゃんこ・もりこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【飯杓子・杓文字】</b> いーがい・いびら・おもどし・さいしんびら・はんがい・へら・めしがい・めしべら・みしげー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 おたまじゃくし お玉杓子	汁を盛るための汁しゃくし。長い柄の先に、くぼみのついた形状。	<b>【汁用の杓子】</b> あっかい・くぼじゃくし・しるあげ・しるまがり・すーがい・すーはい・するがい・なびげ・なびげー・びない・ふやーに・どうふやーに・ふやーにつてい・ペー・ペーら・ペーん・まんのじゃくし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【汁杓子・おたま】</b> かなかい・しるがい・びない・ペー・おつけしゃくし・なびげー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かいじゃくし 貝杓子	貝殻に柄をつけた汁杓子。	<b>【貝杓子】</b> せっかい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 しゃもじさし 杓文字差	杓文字などを収納する容器。	<b>【杓子さし（竹製）】</b> あんごー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 すいのう 水囊	煮たりゆでたりしたものをすくう柄付きの筈。	
 にかご 煮籠	魚をのせて煮たり蒸したりすることで形が崩れないようにする用具。	
 やかん 薬缶	湯茶を沸かす容器。蓋、注口、鉸付き。金属製。	<b>【薬缶】</b> あてがま・いたびん・いんぎん・いんげん・おちゃだし・おどひん・かーんがにやっこん・かま・かまこ・かんし・しちたんやつくわん・ちゃびん・ちゃへん・とーびん・とひん・どひん・はびん・ひちのーびん・みたやっこん・んただっこん・んたやっこん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【薬罐】</b> いんげん・くわんす・ちゃびん・てどりとーびん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 てつびん 鉄瓶	湯茶を沸かす容器。注口、鉸付き。鋳物製。南部鉄瓶が有名。	<b>【鉄瓶】</b> あしや・あしやがんす・あてがま・いーむんやっこん・いむだっこん・いむどうかん・いむんやつくわん・いんぶんやっこん・いんむんやっこん・おचनाべ・おどひん・かなじよか・かなちゆか・かなちよか・かなどか・かなびん・かま・かまこ・かまっこ・かんし・かんす・かんつん・しちやっこん・すいせんびん・ちゃがす・ちゃがま・ちよか・ちよこ・ついついやっこん・ていついやっこん・とひん・どひん・なびだっこん・やかん・やつくわん・ゆがま 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【鉄瓶】</b> あてがま・かなちよか・かま・さゆやくわん・ちゃがま・चनाべ・てつちよか・てつやくわん・はがまやつくわん・ゆがま・でーすがま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 どびん 土瓶	湯茶を沸かす容器。注口、鉸付き。陶器製。番茶や煎じ薬などを煮出すのに、金属製は変質するため、薬缶や鉄瓶ではなく土瓶が使われる。	<b>【土瓶】</b> うま・かんす・しゆかー・しゆっかー・じよか・すーつか・すかー・すかー・すつか・ぞつか・ちゃーちゆつか・ちゃーちゆつかー・ちよか・ちやちよか・ちよじよか・ちよびん・ちよべん・ちよーか・ちよーかー・ちよか・ちよかー・ちよきや・ちよつか・ちよつかー・ちよか・ちよこ・つちちよか・つつじよか・とーびん・どろじよか・ばがす・びん・ほーろく・ほーろくがんす・んただっこん・んたやっこん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【土瓶】</b> うま・くわんす・すが・ちゃだし・ちゃびん・ちよか・ちよか・どびん・びん・ほーろく 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）










名称	説明	さまざまな呼称
<b>甑と蒸籠</b>	伝統的蒸し器には曲物製の円筒形のもの、板を組んだ四角いものがあり、どちらもコシキやセイロと呼ばれ、名称が混乱している。いま分かっている範囲で大胆に歴史を整理すれば、弥生時代と鎌倉時代の2度の伝来に関係しているようである。コシキは漢語ではなく和語であり、曲物製コシキ(甑)の底と見られる穴あき円盤が弥生時代に出土して曲物タイプは弥生時代中期に中国江南系稲作民によって田植えなどとセットで持ち込まれ、糯米を蒸して食べていたと考えられる。他方、四角の蒸籠は呉音の「ジョウロウ」ではなく漢音・唐音系の「セイロウ」と呼ぶことからして伝来はコシキより新しく、鎌倉時代に禅宗が伝わって素麺・うどん・饅頭など粉食文化が入ってきたときに、石臼とセットで禅宗寺院も台所に伝えられ、饅頭などを蒸したのが起源と考えられる。曲物の甑も角形蒸籠も用途は同じ蒸し器だったため、各地で呼び名の混乱が生じたと考えれば辻褄が合う。そこでこの歴史的経緯をふまえて「曲物蒸し器=コシキ、角形板組み蒸し器=蒸籠」と呼び分けることを提案したい。(河野通明)	
 こしき 甑	蒸気で食物を加熱する容器。土器、曲げ物、籠製など。湯の沸いた鍋釜の上に乘せ、底の穴(隙間)から蒸気を通す。	
 せいろう 蒸籠	蒸気を利用する装置。底の隙間から蒸気を通す構造。湯や液体を沸かした鍋釜の上に乘せて用いる。  形態別に、箱蒸籠、曲物蒸籠、桶形蒸籠。用途別に、蕎麦蒸籠、和蒸籠、中華蒸籠 などさまざまな種類がある。	【蒸籠】 こしき・どー・どーふかし・どぶかし・ふかし どー・まんばち・だらくおけ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 はこせいろう 箱蒸籠	蒸籠の一種。板を井桁に組んで方形(箱形)に作ったものをいう。	
 らんびき 蘭引	蒸留器。下部の器に液体を入れて熱し、上部の器で蒸気を冷やして蒸留する仕組み。注口付き。	【酒を醸す甑】 ふすつきー 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
<b>調理・加工用具</b>		
 ぼうちよう 包丁	食物を調理する小刀。庖丁とも書く。用途などにより形状・名称が異なる。  用途別に、刺身包丁、菜切包丁。形状から柳刃包丁。人由来の出刃包丁 などさまざまな種類がある。	【包丁】 うすは・うすば・かたな・しんのみきり・しんのみほーちよ・ちりむん・では・では・ながた・ながたな・ながたほーちよー・ながたら・なんたら・ながたん・なきたな・なきたな・なきたん・なきり・ばーつあ・ばうつあー・ばうつあーかたな・はたな・ふた・ふたー・ぼーざー・ぼーざかたな・ぼーつあー・ぼーつあー・ぼつあー・ほつあー 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【庖丁】 せんぶち・ひぎょろもの 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 さしみぼうちよう 刺身包丁	包丁の一種。薄刃で長く、切り身を引き切るのに適した形状。  柳刃包丁やたこ引き包丁 などがある。	【魚を料理する包丁】 あじわり・いおぼえちよ・いおぼえちよ・うおぼえちよ・えおぼえちよ・よーぼえちよ・よぼえちよ・いよーぼえちよ・うおさき・えよぼえちよ・よきり 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【魚切庖丁】 あじわり・さきとがり・さきぼそ・さばし・さばほーちや・ではさし・なまくさほーちや・ほねうち・よきり 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 なきりぼうちよう 菜切包丁	包丁の一種。幅広で軽く、主に野菜を刻むのに適した形状。	【野菜包丁】 おしばほーちよー・おしばほちよ・さいと・さいとー 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【野菜庖丁】 うすば・さいとー・ながたな・なきたな・なきり・うすば・しんのみきり・しんのみほーちよ・ながたな 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 ではぼうちよう 出刃包丁	包丁の一種。鳥や魚を骨ごとぶつ切りにしたり、さばいたりする。	
 まないた 俎板	包丁を受ける板または脚付きの台。食物を包丁で切ったり、下ごしらえをしたりする際に使用する。	【俎板】 あて・あてばん・きーばん・きっぱ・きっぱん・きりいた・きりつあ・きりはん・きりばん・きりばん・きりばんいた・きりばんのだい・さいいた・さいた・さいばん・さえば・さばいた・しえあばん・しえあばんこ・しえあばん・しゃーばん・しゃばん・しょーじんまないた・せあばん・せあばん・せばいた・せばんこ・ぞーまないた・つんばん・つんばつ・なきた・なきり・なきりた・なまいた・はやしいた・ばん・はんざり・ばんじょー・まらさ・まらつあ・まるちや・よーなりいた 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【俎】 あて・あてばん・きりいた・きりばん・さいばん・さばいた・つんばん・なきた・なきり・ばん・ばんじょー・まなべいた・まるちや・さいばん 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)
 はんざりおけ 半切桶	鮓飯を混ぜたり、魚の行商などに使った浅い桶。通常の桶の半分の意味だが、実際には半分よりも浅いつくり。鮓飯用はスシハンギリ、ハンダイ、ハンボウ、スシハンボウともいい、行商用はウオハンギリ、ウオハンボウなどといった。	【すしを作ったり、餅とりをしたりする底の浅い桶】 すしはんぼ・はんぼ・はんぼー・はんぼん 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一)










名称	説明	さまざまな呼称
 こめつきうす 米搗臼	搗き臼の一種。穀物の精白に用いる。餅搗き臼よりも深く割って、縁を内湾させ、中身を飛び出しにくくした。	【臼】 きうす・くぼ・ちゃんから・てうす 【米つき臼】 なでうす 【松の木の胴を切って作った米つき臼】 どーぎりうす 【米・麦などをつく臼】 よこうす 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【臼】 つすくぼ・くぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 もちつきうす 餅搗臼	搗き臼の一種。餅搗き専用。	【臼】 きうす・くぼ・ちゃんから・てうす 【餅をつく臼】 はちうす 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【臼】 つすくぼ・くぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ふみうす 踏臼	米搗き臼を使った装置。台柄に支点軸をつけた杵を足で踏んで搗く仕組み。カラウス（碓、または唐臼）と呼ぶ地域も多いが、関東の土搗臼（どずるす）のことをカラウスと呼ぶ地域もあるので、名称をフミウスとした。	【長柄のきねの先を足で踏んで米などをつく臼】 だいがら・だいがら・たいごー・ふみから・ふみざつごん・ふんがちつ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【足踏み臼・碓】 じがら・じがらうす・とりい・ふみうす・やくら・よこうす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 みずからうす 水碓	水力で動かす臼。丸太の一方に水のたまる槽を彫り、細く削った片一方の先端に杵を装着し、中央に支点をもつ。寛で槽に水を注ぐと重さで下がり、水が流れ出ると軽くなって跳ね上がり、反対側の杵が臼をつく。	【水流を利用した米搗装置・そうす】 うさぎつずみ・こと・きごんたろー・しかつずみ・そーずがらうす・ちよーずがらうす・ちよーたろー・つずみ・はしき・ぼつたり・ぼつとり・みずなるこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
こうす 小臼	搗き臼の一種で、小型のもの。素材を砕いたり、つぶしたりする。	【小臼】 こーせんうす・こんぼうす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
こぎね 小杵	杵の一種で小型のもの。	【小杵】 たんちよー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【小杵】 たんちよー・ちよろきん・ちよろけん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
きね 杵	臼で穀物や餅や味噌などを搗くときに用いるもの。縦杵と横杵に大別される。	【杵】 あいだち・あじみ・あじむ・あじん・あどうむ・いちろく・いなしき・いなつき・いなひき・いなんつき・いにしき・うちぎ・うちきね・うちぎね・おー・おてま・かけや・きき・きぎ・きぎゃ・きげ・きねずち・きんぎ・くえーさー・つきぎね・てぎね・なんじよ・なんじよー・にーつき・ほっこく・んなつき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【杵】 あじむ・あずん・うちぎ・おー・おてま・きぎ・くえーさー・ちち・ほっこく・やつとこべー・おー・つな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 たてぎね 縦杵	杵の一種。細い丸太の中央を削って持ち手にしたもの。垂直に持ち上げて打ちおろす。	【棒きね】 たてきね 【柄がなく中央のくびれた部分を手で握ってつくきね】 きぎ・せんほんきね・ていあどうむ・てきぎ・てきね・てぎね・てぎの・てつきぎ・てまぎね 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 よこぎね 横杵	杵の一種。先を細くした丸太に柄を付けたもの。木槌に似た形状。振りおろして搗く。近世に普及。	
 ひきうす 挽臼	摺（す）り臼。素材をすり潰して粉にする臼。刻み目をつけた上臼と下臼から成り、上臼を回転させて使う。 粉挽臼、茶臼 など。	【米などをひいて粉にする臼】 こすりうす・こーするうす 【石で作った、粉をひく臼】 むぎゅうす 【粉をつくときに使う腰切り臼の小さいもの】 こんこんうす 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【石臼・挽臼】 からうす・そーす・ぼたうす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 こねばち 捏ね鉢	粉をこねるための深形の容器。多くは木製の削りものだが、陶製もある。	
 のしいた 伸し板	搗きたての餅や、捏ねたうどん粉・そば粉を広げ伸ばすのに用いる大きめの板。打抜（うちぬき）、ノシパン、メンパンともいう。	
 のしぼう 伸し棒	搗きたての餅や、捏ねたうどん粉・そば粉を広げ伸ばすのに用いる細長い棒。めん棒ともいう。	

名称	説明	さまざまな呼称
 すり鉢 搗鉢	食物をすり潰す容器。逆円錐形で刻み目があり、搗粉木と一対で用いる。	<b>【搗鉢】</b> あてばち・いしばち・いしばち・いせばち・えせんばち・えへはじ・おたばち・かーらけ・かーらけばち・かがし・かがす・かがち・かがつ・かなは・かなばち・からけ・からけばち・からちもの・からつ・からばち・かわらき・かわらばち・こねばち・さばち・さわち・しなはち・しのはち・しのはち・しらか・しらげ・しらじ・しらち・しらび・すなはち・すのはち・すりくりばち・すりこばち・せんかい・せんがい・せんぎゃー・せぎゃー・だいば・だいばー・だいばー・でーば・でーふぁー・どんこつ・ないば・なすばち・ひらじ・べんはち・みそばち・めかがち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【搗鉢】</b> いしばち・いせばち・おたばち・かーらけ・かがす・かがち・かがつ・かなばち・からけ・からばち・かわらけばち・かわらばち・さばち・さわち・しなはち・しのはち・しらか・しらじ・しらふぁーち・すなはち・すりこばち・すりこばち（すりこばち）・せんがい・だいばー・でーばー・めかがち・らいばん・かがつ・しらじ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 すりこぎ 搗粉木	食物をすりつぶす棒。搗木、搗子木とも書く。搗鉢と一対で用いる。香りがよく、ほどよい硬さの山椒の木が好まれる。	<b>【搗粉木】</b> うらこわし・うらまわし・うらまわしぼー・おめぐり・おめぐりさん・おめぐりぼー・きね・しりんくじ・しるんぐち・すりぎ・すりきね・すりこぎぼー・すりこんぼ・すりこんぼー・すりぼー・すりめんぼ・すりめんぼー・すりんぼ・すりんぼー・するくい・するくに・するこぎぼー・するこん・ずんぼ・だいばぬぶつとうー・でーふぁーぬする・ですり・ですりこんぼ・てっこんぼー・でんぎ・でんき・でんぎ・でんぎね・でんぎり・ねんぼー・ぼー・ましぎ・まひぎ・まわしぎ・まわり・みそすり・みそすりぼー・めぐり・めぐりこぎ・めぐりぼー・めぐりぼー・めんぐりぼー・めんぼー・りゅぎ・れーぎ・れんが・れんぎ・れんぎね・れんぎぼー・れんぎよ・れんげ・れんげぼー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【搗粉木】</b> うらまわし・おめぐり・おめぐりぼー・しりめんぼー・すりぎ・すりきね・てっこんぼー・でんぎ・でんぎね・でんぎり（でんぎね）・ますぎ・まわしぎ・まわり・めぐり・めぐりこぎ（めぐり）・めぐりぼー・れんぎ・れんぎね 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 おろしき 卸し器	食物（主に根菜類）を摺り下ろすのに用いる突起や刻み目のついた道具。  形状の違いから、鬼おろし、おろし皿、おろし板、おろし金。用途別に、大根おろし、わさびおろし などがある。	<b>【下金】</b> おろしいた・おろしばた・すりかね・せーがな・せんがーしり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【卸金】</b> せんば・おろしいた・せーがな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ふるい 篩	篩ったり濾したりする道具。  粉篩、馬毛篩（裏ごしにも使用） などの種類がある。	<b>【篩】</b> あみじゃくし・いとゆり・いとろし・おろし・けんと・けんど・けんどー・こおろし・こごめとーし・こし・ころし・きで・しーの・しーのー・しーの・じぶ・じゅー・す・すいーの・すいーのー・すいの・すいのー・すの・せーの・そせり・そぞり・たかどし・たかゆる・たけゆり・ちことーし・ちゃぶるい・ちよーせん・どうらつい・とーし・とし・にぶめ・ぬりこし・ひめこ・ふくい・ふりんがえ・ほーろき・まなお・まんごく・むぎじぶ・むぐるし・もぐるし・もみおろし・ゆい・ゆいがま・ゆらし・ゆり・ゆる・よろけ・らくい 【目の細かいふるい】 けふるい・しーの・しーのー・しーの・すいーの・すいーのー・すいの・すいのー・すの・せーの・たも・ちよーせん・みんせーどーし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【篩】</b> おろし・けんど・けんどん・こおろし・こし・ころし・しーの・しーの・じぶ・す・すーの・すの・とーし・ふくい・ほーろき・まなお・むぐるし・ゆい・ゆいがま・らくい・すいーの 【篩の目のこまかい物】 ぐだけおろし・けふるい・さんばら・すいーの・たぶ・ちよーせん・すいーの 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 みそこし 味噌漉	味噌を濾すための小形の笊。	<b>【味噌漉】</b> こんどーし・すいーの・たかけ・ちゃんござーの・とーし・もぐるし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 しょうゆこし 醤油濾し	醤油立、醤油の笊。もろみの中に差し立てて醤油を濾す円筒形の籠。自家製しょうゆの道具。	
 しおかご 塩籠	塩を入れておく籠。水分や苦汁（にがり）を多く含んだ粗塩は籠に入れて吊るし、滴る苦汁を集めた。	<b>【塩を入れる笊】</b> みーざーき 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 じょうご 漏斗	口の小さなものに中身を移す際に使われる円錐状の用具。	<b>【漏斗】</b> かなじょーご・すいかん・すいはく・つごもり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
<b>かた型</b>	食物に圧力や熱を加え、一定の形にまとめる道具。素材形状とも、用途によってさまざま。  鯨型、菓子型、焼型、豆腐箱、巻き簀 など。	

名称	説明	さまざまな呼称
 かしがた菓子型	干菓子をつくる型。陰刻した木型に材料を詰め、圧力をかけて固める。	
 とうふばこ豆腐箱	豆腐をつくる箱形の型。固まりかけた豆乳を流し込み、水分を抜く。	
 まきす巻き簀	海苔巻や伊達巻などを巻く小形の簀、簾。	
 しょうゆしぼり醤油搾り	もろみを入れて重しをかけ、醤油を絞る装置。	
 あぶらしめ油締め	砕いた菜種や胡麻などを入れて油を絞る装置。	
 しおぶね塩槽	シオタライともいう。	
 むぎつぶし麦潰し	麦飯用の押し麦をつくる道具。押し麦機のようなもの。	
 とちむき栃剥き	栃の実の表皮を剥く道具。	
<b>飲食器</b>		
 はし箸	食物などを挟む一対の細い棒。主に料理や食事の際に用いる。用途別に、祝箸、真名箸、菜箸。形態の違いから、割箸、竹箸、塗箸 など。	【箸】 いらくれ・うみす・うめーし・およせ・ごでん・こねぼー・しょつき・つぐり・ったい・てーご・てこ・てこぼー・にほんぼー・まし・ます・めーし・わたり以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【箸】 うみす・おてもと・おめし・てこ・てこぼー・てもと・みざお・めーし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はし入れ箸入れ	箸を収納する容器。立てておくものは箸立てと呼ぶことが多い。蓋付きで横にしまうものなど形式はいろいろ。	
 さじ匙	食物をすくって口に運ぶ道具。柄の先にくぼみを付けた形。	【匙】 けー・こぼし・しっかい・しっかいやーま・すこい・すだみ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【匙】 かい・こぼし・しっけ・せっかい・とんす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 わん碗	飯や汁、菜などを盛る主に一人用の飲食器。木製を椀、陶磁器製を碗と書く。汁椀、飯椀、茶碗 など。	【椀】 おしよーざ・かーつ・かうつ・かき・かさこ・かじよ・こーき・ごき・ごけ・さーら・しのわん・じよーぎ・じよぎ・じよげ・まーいっさーら・わんこ・わんこす 【木製の椀】 こーき・ごき・ごきわん・ごけわん・わんごき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【椀】 おこーだい・おしよーざ・かうつ・かさ・こーだい・ごき・なか・まっかり 【蓋付きの大椀】 めびら以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 しるわん汁椀	椀の一種で汁用。木製のものが多い。	【汁を入れる椀】 おこーで・おこだい・おこで・こーじやー・こーだい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【汁椀】 こーじやー・こーだい・しるまーい・なか 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 めしちゃん飯茶碗	おもに一人用のご飯を盛るのに用いる食器。茶碗は本来、茶を入れて飲むための器だったが、陶磁器製の碗を茶碗と総称するようになったため、ご飯用を飯茶碗、湯茶を飲むものを湯呑茶碗と区別した。木製の場合は飯椀という。	【茶碗】 あやーん・いしごき・いしごけ・きじ・こーき・ごき・ごきじゃわん・ごす・ごつ・じよーぎ・じよーげ・じよげばん・ちゃわんかーつ・てむく・てもく・てもん・てんく・てんむく・てんもく・ななじゃわん・ななちゃ・ならじゃ・ならじゃじゃわん・ならちゃ・ならちゃじゃわん・ならちゃわん・ならつや・はんき・はんきゅーおわん・はんきわん・もつお・わんごす 【御飯茶碗】 おやわん・ちゃじきじゃわん・ちゃずけじゃわん・ちゃずけちゃわん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【茶碗】 いしごき・くいごき・ごき・ててわん・ならちゃ・はんき・まーり・まかり・まはり・おやのわん・じよーぎじゃわん・ななちゃ 【飯椀】 おこーだい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 どんぶりばち丼鉢	椀よりもひと回りほど大きい一人用の飲食器。陶磁器製で、蓋がつくものもある。	【丼】 けんどん・さばち・さんと・ずたち・すだつ・すたつ・ちゃわんばち・ちゃんばち・とんばち・どんばち・どんばち・まんこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【丼】 さばち・ちゃわんばち・ちよぼ・どんばち・けんどん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
 ゆのみぢゃわん 湯呑茶碗	陶磁器製の碗。湯茶などの飲み物用で、一人用。取っ手はつかない。湯茶用の「茶碗」の語が飯用になったため、区別して「湯呑」の語がついた。	【茶飲み茶碗】 おちやくみぢゃわん・しんぢゃじゃわん・せんぢゃ・ぢゃくみ・ぢゃじゃわん・ぢゃのみ・ぢゃんぢゃぶる 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【湯呑・茶呑茶碗】 くほじゃわん・くみじゃわん・せんぢゃ・ぢゃくみ・ぢゃじゃわん・つぼじゃわん・はなこぎ・くみぢゃわん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
めしわん 飯碗	ハレの日に用いる碗の一種。飯やうどんなどの主食を盛る。漆塗りの蓋付き碗。	
 つぼわん 壺碗	ハレの日に用いる碗の一種。小ぶりで深さがあり、おかずを盛る。漆塗りの蓋付き碗。	
 ひらわん 平碗	ハレの日に用いる碗の一種。平たく大きめで、煮物などのおかずを盛る。漆塗りの蓋付き碗。	
さら 皿	飲食器の一種。一人用とは限らず、ひと抱えもあるような大形のものから、手のひらに収まる小形のものなど大きさや形状はさまざま。絵具皿、灯明皿など飲食器以外に使う場合も皿という。  大ききの違いから大皿、中皿、小皿。用途により薬味皿、醤油皿、塩（手塩）皿 などの種類がある。	【皿】 おかいしき・おかさ・おかさら・おかさん・おかさんご・おわち・かいしき・かさ・かさこ・かさっこ・かねこ・かみこ・きせ・ぢゃわんばち・ぢゃんばし・ぢゃんばち・ぢゃんばち・てんころ・はち・まーいっさら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【皿】 かにこ・けーし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 こざら 小皿	飲食器の一種。一人づかいの小さな皿。	【小皿】 おきせ・おひかえ・かいしき・かえしき・きせ・さいなか・てざら・のぞき・ひかえ・へーべー・けーうち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 おおざら 大皿	飲食器の一種。人寄せの際に魚の活造りや鮓など数人前を盛り合わせる大きな皿。色絵・染付の磁器などもある。	【大皿】 おーさはち・かさねばち・さかんばち・すなはち・はーち・ふなばち 【大形の皿のような浅い鉢】 さーち・さはち・さわち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【大皿】 さはち・さわち・すなはち・はーち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はち 鉢	飲食器の一種で、平たい皿に対し、深さのあるものをいう。  大ききの違いから、大鉢、小鉢。縁の一端に注口のある片口。用途により向付、蕎麦猪口 などさまざまな種類がある。	【鉢】 おたばち・さはち・さらんばち・しゃはち・どんばち・どんばち・ばしゅー・まんこ 【大きな鉢】 だんばつ・とんばち・どんばち・どんばち 【どんぶりより大形の陶器の鉢】 おせばち・ぢゃわんばち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鉢】 まんこ 【平鉢】 おせばち・さばち・さわち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
そばちよこ 蕎麦猪口	鉢の一種で、多くは筒胴だが、六角形や八角形などさまざまな形がある。ざるそばやもりそばのつけ汁を入れる容器として広まったが、もとは和え物や酢の物など少量の料理を盛る器。	
 かたくち 片口	鉢の一種で、縁の一方に注ぎ口のあるもの。液体を注ぎ分けるのにも使われる。	【片口】 かぶとばち・くちづけ・ばか 以上、『全国方言辞典』（東條操篇）
しょうゆさし 醤油差	醤油を入れる注口付きの容器。醤油が食卓で用いる調味料となり、小皿に注ぎ分けるのに使われる。調理の際にも用いる。昔は片口が使われた。	【しょうゆを入れる土瓶】 きびし・きびしょ・きびしょー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【醤油入れ】 うんすけ・きびしょ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ゆとう 湯桶	液体を注ぎ分ける器。胴部は円筒形や箱形のものが多い。	
 きゆうす 急須	茶を淹れる容器。注口、持ち手や鉈付きの容器。	【急焼（きゆうす）】 きびしょ・ぢゃこし・ぢゃじよか・ぢゃだし・ぢょか・てじゅかー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
おしき 折敷	食物を載せる台。古くは食事用だが、現在は神仏の供え物を盛る。杉や桧の薄い板に浅い縁をつけた形。	【折敷】 おへぎ・へぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
たかつき 高杯	食物を盛る器。円形や方形の盤に高い脚台がつく形。古くは食事用だが、現在は神仏の供え物を盛る。	
ぼん 盆	食器や菓子などをのせて運ぶもので、材質も形状も多種多様。多くは円形または方形の板の縁を立ち上げて囲み、のせたものが落ちないように工夫されている。	
ぜん 膳	料理を載せて供する台の総称。	【膳】 おしき・おしきぜん・しきぜん・かしわで・じょーぎぜん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【膳】 うしき・おしき・しっぽくだい・はんたい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）



















名称	説明	さまざまな呼称
 たかあしぜん 高足膳	膳の一種。盤の四隅に脚をつけた一人用の膳。脚の形によってさまざまな呼び方がある。  四足膳、蝶足膳、高足膳、猫足膳、银杏膳、宗和膳、胡桃足膳など。	
 はこぜん 箱膳	膳の一種。一人分の食器を入れた蓋付き箱形の膳で、飲食時は裏返した蓋が盤となる。	【箱膳】ぜんぼこ・はんたい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ちゃぶだい 卓袱台	明治時代に誕生した折畳み式の座卓。複数人の食器を並べて食事をする台。	
<b>酒器</b>		
 とっくり 徳利	液体を入れる陶磁器製の容器。胴が膨らみ、口のすぼまった形状。元来は酒に限らず、酢、醤油などの保存・運搬にも用いたが、一般に徳利というと酒徳利を指す場合が多い。酒屋から量り売りで酒を買い求める際に貸し出された貧乏徳利（通い徳利とも）と、燗をつけて飲むための燗徳利に大別される。	【徳利】おかん・かんしろ・かんすず・かんつけ・くり・さかすず・すず・すず・すんず・そろり・つぼ・とく・とつく・とつくいびん・とつくりすず・とつくりちよーし・とつくりつぼ・とつくりびん・はがし・びん・びんすず・ふらそこ・ぼち・ぼつち・ぼろ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【徳利】すず・つぼ・ぼち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
かんとっくり 燗徳利	湯に浸けて酒の燗をするのに用いる小形の徳利。	【酒の燗をする徳利】おかんすず・かぶどく・かんすず・かんずつ・かんどく・たんぼ・たんぼ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【燗徳利】かんしろ・かんすず・かんつぼ・かんびん・たんぼ・はやすけ・ゆせん 【炭火の灰に埋めて燗をする尻のついた徳利】いぎり 【燗をつける道具】かんじよか・きびじよ・ちろり・てしよ・びんろーじ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ちょうし 銚子	盃に酒を注ぐのに用いる器。片口に鉸をつけた形状の提子（ひさげ）形と、片口（または両口）に長柄をつけた形状のものがある。	【銚子】かんから・かんし・ちよーしなべ・ちよこ・はやすけ・ゆせん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 さかづき 盃	盃に酒を注ぐのに用いる器。浅く平たく口縁が広い「平盃」と、口の小さい陶磁製の「小盃」とがある。小盃は形が猪の口に似ていることから猪口（ちよこ）ともいう。	【盃】おりべ・さま・ちんころ・はいま・はんまーくわー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
はいせん 盃洗	盃をすすぐための器。酒に燗をつけて飲む習慣が始まり、陶磁製の猪口で酒のやりとりするようになったため、自分が口をつけた盃をいったんすすいで人に渡すようになり、専用の器が使われた。	
<b>運搬・携帯用具</b>		
べんけい 弁慶	巻藁状の（繊維を束ねた）収納具。筒状の竹籠に藁をつめたものもある。串刺しにして用いる。	【串刺の魚などを刺しておく藁束】べんけー・ほで・まきたて・わらずつ・のぼり・ほーぜ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 きりだめ 切溜	入子状の蓋付き容器。入子（いれこ）ともいう。多くは長方形の漆塗りで、冠婚葬祭時に用いる。料理材料を切り溜めたり、料理を配ったりする際に使用。	
ひろぶた 広蓋	お盆のような形状の浅く広い容器。諸蓋（もろぶた）・麴蓋（こうじぶた）ともいう。何個かがセットになっていて、入子状に収納できるものもある。	【食物をいれる長方形の箱】きりだめ・こーじうた・つきだめ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 じゅうぼこ 重箱	同形の箱を何段も重ねておくことができる容器。一番上に蓋がつく。ハレの日のご馳走や、行楽時の弁当、田植えや稲刈り時の飯入れ、近所へのお裾分けなどに用いた。	【重箱】おはち・さげ・さんじゅー・じゅーばち・じゅーらい・じゅこ・じゅっこ・じよーばち・たじ・はち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【重箱】おはち・きりだめ・たじ・かきなばち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 さげじゅう 提重	提げ手のついた運搬箱や盆と、重箱を組みにしたもの、または手提げ箱の中に重箱や銘々皿、酒器などを組み合わせて収めたものを指す。物見遊山や行楽の際の弁当箱として利用した。	
 おかもち 岡持	食べ物や食器を入れて持ち運ぶ提げ手のついた容器。桶形、箱形、竹籠、落とし蓋のついた縦長の箱など形態は様々。	【岡持】たじ・さげぼこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
べんとういれ 弁当入れ	弁当箱のことも弁当入れという場合があるが、ここでは弁当箱や弁当行李などを入れたり、大人数分の弁当を運んだりする袋や容器をいう。	【稲わらの芯で作った弁当を入れる小さな行李】にごこーり 【山行きの道具や弁当などを入れる、わらや布製の背負い袋】 いじーご・いじこ・いじこぶくろ・いじごこ・いちご・しよいあみ・しよいかご・しよいごしご・しよいごしご・しよいごり（樹皮製）・しよいぜーふ・しよいつこ・しよいなーだーら・しよいびく・しよいぶくろ・じんきち・じんきちぶくろ 【山へ行く時、弁当などを入れる編んだ袋】 てふご・ひるつつ・ひるてご・ひるまふご・ひんたわら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【弁当袋】 うちがい・にんだら・びく 【弁当を入れる籠】 かがり・こえばら・ひんたわら 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
べんとうぼこ 弁当箱	携帯する食事を入れる容器の総称。	【弁当箱】 あっぼ・がい・がえ・かwego・くらがい・くらげ・ちゅーはんごり・ひるがえ・めつぱ・めんぼ・きりめ・こじきばち・ちげ・めしわっぱ・わっぱ・わりご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 めんば	曲げ物の弁当箱。語源は飯輪とされる。削木（へぎ）を円形に曲げて底を張ったつくり。山仕事や漁などに携帯した。曲げ物全般は輪っぱと呼ばれる。	
 べんとうごうり 弁当行李	竹やコリヤナギなどを編んでつくった弁当箱。	
 つと 苞	藁などを束ねた包み。中に食品を入れる。藁苞、巻藁ともいう。保温などの役割があり、握り飯、イモ、餅などを入れて運んだ。藁苞納豆などの食品加工にも使われる。	【藁苞】 すぼき・すぼけ・すもー・たかんばん・たわら・つつこ・つつっこ・つつこみ・つとご・つつわら・つといれ・つとご・つとし・つとご・つとごー・つとわら・ほぜ・ほで・わらしぼ・わらすぼ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
すいどう 水筒	飲料水などを持ち歩くための容器。古くは瓢箪や竹筒などで作られた。	【竹の幹で作った液体の容器】 ささぎ・ごんご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
喫煙具		
 たばこいれ 煙草入れ	刻み煙草を入れて携帯するための道具。	【煙草入れ】 かまぎ・かます・かっぱたばこいれ・ざったり・すんぎり・どらんこ・とんこ・とんこつ・のーてんき・のんこつ・やろー・おてぼつ・ちりたみ・ゆんどー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 きせるいれ 煙管入れ	煙管を入れて携帯するための道具。	
 たばこぼん 煙草盆	火入れ（火種）と灰筒（吸い殻入れ）をセットにして容器に組み込んだもの。煙管掛けや提げ手、引き出しが付いたものもある。	【煙草盆】 ひいけほん・やくぼん・ひぼん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 きせる 煙管	刻み煙草を吸うための器具。筒の両端に火皿（雁首）と吸い口がついており、間をラウ竹でつないだものや、陶器や金属、ガラスなどで一体に作られたものもある。また、形態による名称に、銚豆に似ていることから名がついたナタマメキセルがある。	【煙管】 がんばち・しょろけて 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
<b>住の用具</b>		<b>長井亜弓</b>
<b>火床の用具</b>		
 <p>いろり 囲炉裏</p>	<p>火床（火を焚く場所）の一種で、屋内の床や土間に四角く仕切って作った設備を指す。煮炊きや暖房に使う。台所の土間寄りにあることが多く、囲炉裏の火を絶やさずに保つことが、主婦の重要な役割とされた。</p>	<p>【囲炉裏】 いじろ・いなか・えなか・いればた・いれぶち・いんなか・えぬぎ・えれんなか・えろぶち・よぶち・えんなか・えんなた・おくど・おくら・おまえくど・かなご・かなみ・かまど・きじり・きりくど・くど・しびつ・しびと・しぶと・しぶど・しほと・じる・じろ・じろー・じろぎ・じろり・すびと・すぶと・ちろ・ちろり・どんど・ひーたきば・ひーたくぼ・ひじろ・ひたきじろ・びつー・ひつぼ・ひとこ・ひなか・ひなた・ひのなか・ひびと・ひぶと・ひほど・ひむしば・ひんなか・ふげんさま・ふんごみ・ふんごみろ・へなか・へんか・へんなか・ほいろ・ほど・ほろ・まっこ・まっこー・よろばた・よろぶち・よろぶつ・よろびつ・ろえん・ろぶち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【炉】 いれし・いんなか・えぬぎ・えれんなか・えんなか・おくら・おまえくど・かなご・かまど・くど・げろ（山言葉）・ししり・しじろ・しびつ・しびと・しぶと・じろ・すびつ・すびと・ひじろ・びつー・ひなた・ひぶと・ほど・まっこ・ゆるぎ・ゆるぎ・ゆるり・ろえん・ひじろ・ほいろ・まっこぎ・ゆりー・ゆるり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>じざいかぎ 自在鉤</p>	<p>鍋類を吊るす鉤の一種。高さが自由に調節できる。</p>	<p>【自在鉤】 おあんさま・おかま・おかまさま・かぎ・かぎさま・かぎしょー・かぎだけ・かぎつけ・かぎつるし・かぎどの・かぎのはな・かぎんさま・かけずな（縄製）・がったり・じろかぎ・つるし・ござるかぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
<p>そらかぎ 空鉤</p>	<p>自在鉤を吊る鉤。梁から下げる。 エビス、ダイコク などの種類がある。</p>	<p>【自在鉤を下げる鉤形】 そらかぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
<p>かまど 竈</p>	<p>火床（火を焚く場所）の一種で、煮炊きに使う装置。火床を土、石、煉瓦などで囲み、上に鍋、釜、網などを載せる。東日本の農山村では囲炉裏で煮炊きを行う地域が多く、竈を用いるようになったのは比較的近年のことである。一般に、家庭の火床には竈神が祀られ、オクドサンなどと呼ばれた。  円陣クド、西洋竈 など、竈口の数や作り方はさまざま。</p>	<p>【竈】 いえなか・いなか・いろり・えんなか・おーがま・おかまさま・おかまさん・おかまはん・おくど・おくど・おくどはん・おくどさん・おくどはん・おこーじんさま・おとこはん・おふる・かぎどこ・かざりくど・かまいさん・かまえさん・かまくち・かまくど・かまくどはん・かまくろ・かまさん・かまはん・かまだん・かまち・かまくど・かまとこ・かまどこ・かまどこい・かまどこまえ・かままえ・かまのたん・かまば・かまほど・かまや・かまんくち・かまんでー・かまんひた・かまんぼ・かまんぼー・きじり・くず・くずし・くずがま・くぞ・くど・くどー・くどー・くどがま・くどこ・くどさん・くどし・くどどこ・くどば・くどまい・くろ・くんと・こーじんさん・こど・こり・さんぼーさん・さんぼーはん・しもくど・じろ・すいがま・すぼたん・ちゃね・ちゃーねん・つちくど・どーこ・にわくど・ぬかべつひい・はま・ひじろ・ひぞこ・ひとこ・ひどこ・ひのほと・ふど・ふる・ふるとこ・ふんし・へつすい・へつすいさん・へとこ・へどこ・ほど・ゆるり・ゆり・ゆりばた・ゆるり・ゆるり・ろくだい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【竈】 いなか・おかまさま・おくどさん・かま・かまくど・かまだん・かまのくち・かまぼ・かまほど・かまや・くず・くずし・くど・くどがま・くどこ・くどば・くどまい・くろ・しもくど・じろ・すぼたん・ひとこ・ひのほと・ふど・ふる・ほど・ゆりばた・かまだん・さんぼーさん・ひとこ・ふるとこ・へどこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>ひふきだけ 火吹き竹</p>	<p>火種に空気を送り、火勢を増すための道具。適当な長さの1本の竹を片方の節だけ残して切り、底に小さな穴をあけたもの。火種に燃料を添え、小穴のほうを向けて息を吹きつけて火をおこす。</p>	<p>【火吹竹】 くすいたけ・ふきつぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>うちわ 団扇</p>	<p>あおいで風を起し、火力の調節にも使われた。細く削った竹の骨に紙または布などを貼ったもので、台所では柿渋を塗った渋団扇が重宝された。</p>	<p>【団扇】 あうち・あおち・あぶち・うっぱ・おーじ・おーに・おちゃ・おちや 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【団扇】 あうち・あおち・あぶち・だいせん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>ひばさみ 火挟</p>	<p>炭などの固形燃料や燠など、火の周辺のを挟んで移動させる道具。 二本の細い鉄棒から成る箸状のものや、ピンセット状になったものもある。</p>	<p>【火箸】 いらくれ・いらくら・でっち・びーばさん・びばーさん・ひばさみ・ひばさん・ひやっさん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p>
 <p>ひかき 火掻き</p>	<p>火の中から燠や燃えさを掻き出したり、移動させたりして火力を調節するための道具。 先端が鉤状になった棒など。</p>	

名称	説明	さまざまな呼称
 じゅうのう 十能	炭火や灰を運ぶ容器。長い柄のついたスコップ状のものは、囲炉裏や竈の灰や燠（おき）を掻き出したり、そのまま運んだり多目的に用いられることから「十能」と呼ばれた。ヒカキ、スキカキともいう。下部に台のついた「台十能」もある。	【十能】 おきどり・おきかき・おきすき・おくすけ・おきすくい・おきどり・おくすくい・おっかき・おっかきけ・かまさらいきなー・かんじゃ・かんじゃく・すかき・すくく・せんぼ・せんぼ・せんぼん・せんべ・せんぼちーとういきなー・ひーしちやー・びーしゅくいむぬ・びーすくい・びーすくやー・びーすくいむぬ・ひいれ・ひかき・ひすき・ひすく・ひすくい・ひすけ・ひすつ・ひつかき・ひとり・ひやすくい・ふいーしちやー・へすき・へすく 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【十能】 おきかき・おきすくい・おっかき・かんじゃ・かんじゃく・さっけー・さんの・すくり・せんぼ・せんぼん・ひかき・ひすくい・まつすくり・しゃな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ひけしつぽ 火消し壺	燃えさしの消火に使う蓋付きの密閉容器。単に消壺ともいう。薪や炭の燃えかけの赤い部分を火箸で挟み出し、壺に入れる。できた消し炭は火移りがいいので、炭火をおこすときなどに用いる。	【火消壺】 けしがめ・けしごがめ・かしぼち・ほーろく・からけしつぽ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ごとく 五徳	鉄輪の一種。鍋釜台。円形の鉄の輪に3本の脚がつく。	【五徳】 うわおき・おこじんさん・かなおさん・かなぐさん・かなご・かなごさん・かなでさん・かなごさん・かなわ・かの・かのー・こーじん・こーじんさん・さんそく・さんとく・さんどく・さんとこ・さんぼあし・さんぼーこーじん・さんぼーさん・さんぼんあし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【五徳】 かなぐ・かなご・かなわ・かのー・さんそく・さんとく・さんぼんあし・びんかけ 【鍋などをかける三脚】 ごとく・さんきゃく・さぎつちよ・さんぎつちよ・さんぼんあし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 わたしがね 渡金	鉄輪の一種。上部が格子や網状で、餅や魚などを焼くのにも使う。鉄器、焼台、渡網などともいう。	【てつきゅう・鉄架・編】 あぶりこ・あみわたし・ごとく・てき・てつき・わたしがね 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
暖房具		
ひばち 火鉢	中に炭火を入れ、手足を暖めたりするのに用いる暖房具。古くは火桶・火櫃といい、単に「火鉢」というときは、陶器製の丸形のを指す場合が多い。湯を沸かしたり、食べものを焙ったりすることもある。  丸火鉢、箱火鉢、角火鉢、長火鉢、手あぶりなどの種類がある。	【火鉢】 おかふる・ひいれ・ひいればち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【火鉢】 ちゃわんひばち（瀬戸物）・ひばこ・びんかけ（唐金） 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 まるひばち 丸火鉢	火鉢の一種で、陶器製丸形。単に「火鉢」というときは、これを指す場合が多い。	
 はこひばち 箱火鉢	火鉢の一種で、板作りされた方形なものを指す。「角火鉢」ともいう。大きさは九寸ないし一尺、高さ一尺内外が普通とされる。	
 ながひばち 長火鉢	火鉢の一種で、長方形の箱型。一般に、長さ二尺、幅一尺二寸、高さ一尺一寸程度の大きさで、引き出しがついたものもある。	【長火鉢】 おかろ・おきろ・じょたん・だいす・ながろ・はこひばち・ぶしょぶろ・やまとぶろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 てあぶり 手炙	火鉢の一種で、持ち運びやすい小形なもの。寄り合いや人寄せの際に、各人または数人に一つの割で前に置き、暖をとる。	【手あぶりの小さい火鉢】 しゅーろ・ふいーるー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【手焔】 しゅーろ・ひいればち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はいならし 灰均し	炭火や熾に灰をかけたり、灰を均したりするための籠。薄いブリキ製が多い。	【灰ならし】 あくせんば・いけべら・かなべら 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ひばし 火箸	炭などの固形燃料や燠など、火の周辺のを挟んで移動させる道具。主に二本の細い鉄棒から成る箸状のものが使われる。	【火箸】 いらくれ・いらくら・でっち・びーばさん・びばーさん・ひばさみ・ひばさん・ひやっさん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 すみいれ 炭入れ	日常使う分の炭を一時的に入れておく容器。炭俵から日々使う分を小出しに移して使った。形状は籠や箱などさまざま。	
 あんか 行火	手足をあたためるために用いる移動用の火爐。炭火を入れた容器が小形の覆いに仕込まれており、持ち運びできる。ねこ、猫火鉢ともいう。	【行火】 おかごたつ・つじばん・つちばん・つみばん・ねこ・ねこひばち・ばんこ・ばんこ・ばんしょ・ばんた・ばんどこ・ばんとこ・ばんどこ・ばんどころ・ひばこ・ほんそ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【炬燵・置炬燵・行火】 おほこ・つじばん・つちばん・どんつ・ばんこ・ばんしょ・ばんた・ばんどこ・ばんや・ほんぞ・ほんぞこたつ・おがこたつ・しおけ・ばんどこ・ふいーるー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）














名称	説明	さまざまな呼称
 ひいれ 火入れ	中に炭火を入れる容器。 こたつや行火の熱源に用いる。	
 こたつやぐら 炬燵槽	熱源の周囲を囲う木組みの枠。 上に布団をかけて暖房具として用いる。  置炬燵・槽炬燵、高炬燵・腰掛炬燵、掘り炬燵・切炬燵、行火炬燵などの種類がある。	【置きこたつ】ひばんこ 【炬燵】あんかん・あんこ・おほこ・しおけ・ひおけ・ひばんこ・やぐら・やばれ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【炬燵・置炬燵・行火】おほこ・つしばん・つちばん・どんつ・ばんこ・ばんしょ・ばんた・ばんどこ・ばんや・ほんぞ・ほんぞこたつ・おがこたつ・しおけ・ばんどこ・ふいーるー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ゆたんぼ 湯湯婆	熱湯を利用した暖房具。 容器に熱湯を入れ、縫い合わせた布や専用の布袋で包み、寝床に入れて足・腰を温めるのに使う。	
<b>灯火具</b>		
発火具および灯火具は「灯火具」の項参照。 掲載項目／火打金、火打石、付木、マッチ、火打箱、付木箱、火打袋、松明、松明台、篝、油皿、灯芯、灯芯押え、秉燭、灯台、灯籠、瓦灯、行灯、有明行灯、八間、行灯皿、油差し、給仕箱、カンテラ、石油ランプ、蠟燭、燭台、手燭、打燭、提灯、龕灯、芯切鋏、火くそ壺、カーバイドランプ		
<b>間仕切り・家具</b>		
 ついたて 衝立	脚付きで自立する可動の間仕切り。	【衝立】かざし・ざちゅー・つきたて 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 びょうぶ 屏風	折り畳み構造で自立する可動の間仕切り。儀礼や婚礼、祭礼などに用いるもののほか、枕元に立てる「枕屏風」などもある。	【屏風】ふたおり・きこのしふ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 すだれ 簾	戸口や窓などの開口部に垂らす簾の一種。 編目の隙間が風と光を通しつつ、日光除けと目隠しとなることから、おもに夏の遮蔽具として用いられる。  窓すだれ、戸口すだれ など。	【簾】かぎす・かけす・しじ・す・すじ・てす・みじやら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【簾】えきら・みす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 よしず 葦簾	住宅の開口部に垂らし、部屋の内外を隔てたり、日光を遮ったりする簾。 水辺に自生するアシの茎を糸で編んで作られ、主に夏に用いられる。	【葦であんだ簾・よしす】すだれ・すごろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 あまど 雨戸	閉めれば家屋の外壁となり、風雨除けや防犯の役割を果たす引戸。日中は戸袋に収納し、夜間や荒天時に用いる。	【雨戸】いぬふせぎ・おーと・おーど・おくりと・おと・くろと・そとのとー・だどうー・とー・はしる・はんど・ほんど・まくり・まくりど・やーど・やど・やどう・やりど・やんどう 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 のれん 暖簾	日除け目的で掛け吊るしたり、出入り口や部屋の仕切りをするために垂らす布。	
 しょうじ 障子	間仕切りとなる引き戸で取り外し可。居室を区分した。一般に障子という場合は「明かり障子」を指すことが多い。これは、木枠の片面だけに紙を張り、明かり取りの機能を持たせたもの。  【季節別】雪見障子、書院障子、柳障子、夏障子。【開閉方式】引障子、開障子、嵌込障子、摺上障子。【縦横組子の形】縦繁障子、横繁障子、霞障子、大阪格子。【その他】東障子、腰付障子、腰高障子、水腰障子 など、さまざまな種類がある。	【障子】あかい・あかいさんばしり・あかいさんばしる・あかり・あっかい・さま・しょーじまど・すてい・そーじやどろ・はーり・まど 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【障子】あかり・さま・あかい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ふすま 襖	間仕切りとなる引き戸で取り外し可。寝室を区分した。木枠の両面に紙を張った構造で、「襖障子」「唐紙障子」ともいう。	【ふすま】あいじきり・たてもの・びょうぶ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【襖】なかばしる 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 らんま 欄間	明かり取りと通風の機能をもたせた装飾板。引戸の上、壁の上部にはめ込んだ。	
 じょう 錠	門扉や箆箱、箱類などの開口部に仕掛け、口が開かないようにするための道具。 仕掛け（錠）と閉じ棒（鍵）は一对となっており、併せて錠前という。	【錠・錠前】かため・さし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）

名称	説明	さまざまな呼称
 かぎ 鍵	錠を開閉する道具。 特定の錠の穴に合わせてつくる。	<b>【錠】</b> かぎこ・かざんこ・かざんちよ・かんかね・か んかね・さーしぬつくわ・さーしぬぼー・さーすいぬつ くわ・さし・さしぬくわー・さしぬくわ・さしぬつく わ・さしんつくわ・さしぬつふあ・さしぬふあー・さし ぬふああ・さしんくわ・さちぬふあー・じょーのこ・よ かぎ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【錠】</b> さしぬくわ・さす・じょーのこ 以上、『標準語引 分類方言辞典』（東條操篇）
 しんぱりぼう 心張棒	引き違い戸の戸締りに用いる棒。 建具と敷居に斜めにかませ、開かないようにする仕組み。	<b>【戸締りの棒】</b> おしかいぼ・おっかいぼー・きりぱりぼ ー・せんぼー・つごんぱり・つぱり・つぱりぼー つぱり・つぱり・つめ・つめぼー・つんがりぼー・つん ぱり・つんぱりぼー・とかきぼー・とぱり・とぱり とんぱりぼー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮 一） <b>【心張棒】</b> きりぱりぼー・こーぱり・しんざし・せんざ し・とさんぼー・とずめ・とんぱりぼー 以上、『標準 語引分類方言辞典』（東條操篇）
 みずや 水屋	台食器や調理具、食物などをしまう可動の台所用収納具。 水屋箒筥、食器棚・食器戸棚ともいう。	<b>【戸棚】</b> こと・さんがい・じゅーだな・じょーだな・じ よだな・しんぼろ・ずし・たなもと・たのまえ・たのも と・ふだな・ふつたな・ふるだな・ふる・ふんだな・ほ ろー・ぼら・ぼろ 【食器や食物などを入れておく戸棚】 ふだな・ふるだな・ふる・ふる・ふるだな・ふんだな <b>【食器類を入れておく戸棚】</b> さんがい・せんだな・てん だら・ひきど・みずや・みっじゃ 以上、『標準語引き 方言辞典』（佐藤亮一） <b>【戸棚】</b> おしこみ・おしろい・こと・こみ・しんぼろ・ どーこ・ねずみぐら・ひつ・ふだな・ふつだな・ふる ぼろ・おしこみ・ちよーてい 【食器棚】 ふろだな・は いらす・ふいついき 以上、『標準語引分類方言辞典』 （東條操篇）
 たんす 箒筥	扉や引き戸、戸棚や引出しのついた収納箱。 衣裳箒筥、茶箒筥、帳場箒筥、菓箒筥、船箒筥、階段箒筥など、 さまざまな種類がある。	<b>【箒筥】</b> たんじ 【衣類箒筥】 きんびつ・きんべつ 【引 出し四つもの二個の上に上置き一個が組み合わさった 箒筥】 みつよせ・みつよせ 以上、『標準語引き方言 辞典』（佐藤亮一） <b>【箒筥】</b> きんびつ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東 條操篇）
 ちゃだんす 茶箒筥	居間に置き、湯茶や菓子、小間物などを収納する戸棚、箒筥。 茶道具を置くための茶棚から発達。違棚・袋戸棚・抽斗などを 適宜組み合わせたつくり。	<b>【茶箒筥】</b> ちゃぼんこ・ちゃぼんとざな（ちゃぼんこ） たいす・たえす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條 操篇）
 ほんばこ 本箱	西洋式製本の書物を納める専用の戸棚。 書棚ともいい、扉やガラス窓をつけたものもある。	<b>【本箱】</b> しゅむつはいく・しよもつばこ・たじ・ぶんこ ぼこ・ぶんこぼこ・ほんこ・ほんだじ 以上、『標準語 引き方言辞典』（佐藤亮一） <b>【本箱】</b> ほんたじ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東 條操篇）
 けんどんばこ 儉鈍箱	特殊な蓋のついた収納箱。慳食箱とも書く。 正面の出し入れ口には、上下もしくは左右に溝がきってあり、 慳食蓋と呼ばれる蓋をはめこむ構造。開口時は上にスライドさ せて引き抜くか、溝から持ち上げて外す。もともとは一杯を盛 り切りで供した慳食うどんや慳食そばの出前箱だったが、和綴 じ本などさまざまなものの収納にも使われる。	
 ひつ 櫃	衣類や装身具、その他調度品を入れる蓋付きの収納箱。運搬具 も兼ねる。 大陸から伝わった四脚・六脚のものを「唐櫃」といい、後に脚 をつけない「和櫃」も作られた。	<b>【櫃】</b> きち・きつ・きっち・きつつ 以上、『標準語引分 類方言辞典』（東條操篇）
 ながもち 長持	衣類や布団、調度品などを入れる蓋付きの収納箱。運搬具も兼ね る。 長方形の蓋付きの箱で、棹を通して二人でかついで運ぶ。  絹櫃、車長持 など。	<b>【衣類箒筥】</b> きんびつ・きんべつ 以上、『標準語引き方 言辞典』（佐藤亮一） <b>【長持】</b> いっけんびつ・かい・ひ 【車長持】 からと 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 つつら 葛籠	衣服などの収納に用いる蓋付きの収納箱。運搬具も兼ねる。 形は長方形で、藤蔓や竹・栓の剥片を編んだ籠に渋・漆などを 塗った。重い紐の付いているものもある。	
 こうり 行李	入れ子になるふたがついた物入れ。 多くは竹や柳で編まれ、柳の皮でつくったものを柳行李、竹製 のものを竹行李という。小さいものは弁当箱、大きなものは衣 装箱などに使用。旅行時または日常衣類の整理収納に用いた。  竹行李・柳行李 など。	<b>【行李】</b> かんご・くりばぐ・くりぶぐ 以上、『標準語引 き方言辞典』（佐藤亮一）
 えもんかけ 衣紋掛	衣服を掛けたり吊るしたりする道具。現在のハンガーに対応。 江戸時代から用いられた服かけの一種で、衣紋竹、衣紋棹とも 称する。1m弱の細い棒の真ん中を紐で吊り、着物の袖を通して かける。	<b>【衣架】</b> かけざお・かけざわ・きもんざお・そぞ・なら し・みせざお・みぞかけ・みぞぞ 以上、『標準語引分 類方言辞典』（東條操篇）





名称	説明	さまざまな呼称
 いこう 衣桁	衣類を掛けたり吊るしたりする道具。衣架（いか）・御衣掛（みそかけ）ともいう。鳥居形と屏風形がある。	
 さお 棹	天井から腕木を吊るし、一本ないし二本の棹を渡したものの。	
 かけじく 掛け軸	書画を軸物に表装し、壁などに掛けて飾りとし、または観賞するもの。	【掛物・掛軸】 えさん・かけさん・とこえ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 つくえ 机	読書をしたり、物を書いたりするための脚付きの作業台。 書見台、文机、二月堂 などの種類がある。	【机】 いば・いばん・えば・ごき・しくだい・しこーく・しゆく・しゆくだい・しゆくで・しゆくでー・しよ・しよーく・しよき・しよく・しよくい・しよくえ・しよくけー・しよくだい・しよっ・すく・すくー・すくだい・すくだい・すくで・すくでー・そく・ばん・ばんなか・ふんこ・ほんこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【机】 えば・ごき・しゆく・しゆくだい・しよく・すくで・ばん・ふんこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ひじかけ 肘掛け	座ったときに肘を掛け、からだをもたせかけて休息するために使う道具。脇息ともいう。	
 ふみだい 踏み台	手が届かないときなど、上に乗って高さを補うために使う台。 西日本では足継（あしつぎ）というところが多い。	【踏台】 あしあげ・あしつき・あしつぎ・あしらげ・あしやげ・あつつき・いつきやく・うーま・うま・うまい・きんま・くだみ・くらかけ・くらかけ・けたつうま・けたつんま・げっぱ・せーつき・せつき・だいがら・だいはこ・たかあし・たけずき・たけつき・だんばこ・はこうま・ひみつぎ・ふまいつき・ふまえ・ふまえつき・ふまえつき・ふまえど・ふんまえど・ふみあがり・ふみあげ・ふみいた・ふみうま・ふみすぎ・ふみずげあ・ふみだん・ふみつい・ふみつぎ・ふみやつき・ふんずき・ふんだぎ・ふんだん・ふんばい・ふんばり・ふんまえ・ふんみやがり・ふんめあつき（脚立）・まくらばこ・まこ・まつこ・やしよんま・やせうま 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【踏台】 あしつき・うま・きやたつ・けたつ・じんご・せーつき・せつき・たかあし・はこうま・ふまいしよーき・ふまいつき・ふみあがり・ふみあげ・ふみつぎ・あしあげ・けつば・ふまえつき・ふんだぎ・やせうま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 はしご 梯子	昇降のための道具。二本の縦木に等間隔に横木（棧）をとりつけたり、一本の棒に刻みを入れたりして「段」とし、壁などに立てかけて高所への昇り降りに使用する。縄や布などの柔らかい素材で作ったものは、吊るして使う。 一本梯子（丸木梯子）、二股梯子、縄梯子、猿梯子、折梯子、棒梯子、脚立 など。	【梯子】 あしろ・あする・あんばし・さしばし・はし・ばし・はしご・ばしり・ばしる・はしんこ・ばつい・はちちー・はつついー・はみのこ・はんのこ・ふあし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【梯子】 あしろ・あまばし・ごすけ・さしばし・はし・ぼーしゆー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 きゃたつ 脚立	自立形の梯子。庭木の剪定や高所の修繕などの作業の際に、台として使用する。	【折畳式の踏み台・脚立】 ぎんま・くらかけ・さんぎよ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
<b>しきもの敷物</b>	下に敷いて使うもの。クッションや汚れ除け、装飾など目的はさまざま。 莫塵、筵、薦、猫筵、絨毯 など。	【敷物】 えんご（藁製）・すがき（竹製）・わらだ（藁製）・にくぶく（藁製） 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 むしろ 筵	植物で編んだ粗い敷物。さまざまな用途に利用。通常土間に敷かれる。	【筵】 いなばき・いなばきむしろ・いなばきみしろ・いなまき・いのばきみしろ・いまなく・うらむしろ・かわむしろ・このはね・すと・むっしょ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ねこむしろ 猫筵	ネコ編みで作った筵。堅固な編み方で厚みがあり、板の間で使用された。とくに囲炉裏の周りは畳ではなく、これを敷いた。	
 こも 薦	古い時代の敷物。筵が登場してからは農作業の簡易な敷物となり、神事などに利用。	
 ござ 莫塵	植物で編んだ目の細かい敷物。 ござは通常イグサの茎を緯にし、経に木綿糸を用いて織りあげた無地の敷物をいう。さまざまな用途に利用され、板の間に敷いたり畳の上敷としても使われる。 薄縁（うすべり）、花ござ などがある。	【莫塵】 おすべらかし・てしま・とーしごだ・ばたむす・まくり・めぐり 【敷きござ】 はぐり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【藁・薄縁】 おしまき・ねござ・へつとり・へりととり・まくり・うしまち・しっこー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）

名称	説明	さまざまな呼称
 たたみ 畳	土台となる床の上に植物で編んだ目の細かい敷物（ござ）を張った厚手の敷物。 本来は座ったり寝たりする時に敷く座具で、はじめは筵を何枚か積み重ねたものだった。	【畳】 あつじょー・あつどこ・あつべり・うえ・とこ・ひこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【畳】 あつじょー・あつどこ・あつべり・とこ・むしろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
すのこ 簀子	竹や板などの素材を隙間を開けて並べ、横木に固定した敷物。流し台としたり、風呂場に置いたり、湿気を避けるために押入に敷いたり、水切りや通風の必要な場所に敷くことが多い。	
 ふろしき 風呂敷	本来は、風呂場の床に敷いたり、着替えを持参したり、荷物の目印に使用した布。その後、運搬に欠かせない道具となり、現在でも多目的に使われている。	
えんざ 円座	お尻の下に敷く円形の敷物。渦巻状に平らに編む。ワラウダ、ワロウダともいう。	
 ざぶとん 座布団	座るときに敷く綿入りの敷物。小布団。	【座布団】 いどりぶとん・こぶとん・さぶとぎ・しきね・しきぶとん・つまぶとん・ふとぎ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【座布団】 ふとぎ・つまぶとん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
<b>寝具</b>		
 ふとん 布団	就寝時に体の下に敷いたり、上に掛けたりする道具。 布を重ねて厚く縫い合わせたものや、袋状に縫って中に詰め物をしたものもある。古くは藁・籾殻・海藻などを敷いたり、板敷の上に藁や藁座を敷いて寝床とし、着ていた着物を上掛けにした。江戸時代に木綿が普及すると木綿の側に木綿綿を詰めた蒲団が登場し、着物形の上掛にも綿を入れたものがつくられ、江戸時代末には四角い夜着が関西で使われ始めた。  敷き布団、掛け布団、かいまき布団、羽毛布団、シビ布団、真綿布団 など。	【布団】 うーず・うーど・うーどろ・うーどろー・うーず・うーずー・うど・うどろ・うんず・にしき・ねしき・ねじきい・ふとぎ・ふとげ・ふみしたぎ・ぼった（ぼろ布団） 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【蒲団】 うーど・うーず・うど・ふとぎ・ふみしたぎ・ぼた・うーどろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 かいまき 掻巻	袖や襟のついた綿入れ着物の形をした掛け布団。夜着ともいう。	【夜具】 やぶつ・よかぶり 【袖のある夜具・かいまき】 ねまき 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ねまき 寝巻	寝間着とも書く。就寝時に身につける衣服。着古した浴衣なども利用された。	【寝巻】 かいまき・たんぜん・ねあわせ・ねいしょ・ねいそ・ねいしょ・ねき・ねぎ・ねぎむの・ねぎもの・ねぎよき・ねぎりもん・ねぼ・ねもくい・ねまぎ・ねんねば・ねんねんぎ・ゆるち・よぎ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【寝衣】 ねもくい・ねんねば・よかぶり・かいまき・ねいしょ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
まくら 枕	就寝時に頭を支えるため下に敷く台。 近代までは木の箱を台として、その上に小さなくり枕をのせた箱枕が一般に用いられた。  箱枕、船底枕、陶枕 など。	【枕】 あてがい・くるばつといー・ごき・ちゃまくら・といやまくら・とてあな・ふせまくら・ぼーずまくら・まつくわばく 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 はこまくら 箱枕	就寝時に頭を支えるため下に敷く台。 木枕の一種で、箱型に作られた。下が扇状に広がった奥行の狭い台形で、その上に小枕という括枕を和紙に包んで取りつける。結った髪形が崩れないように女性が多く使用した。  船底枕 など。	
<b>水まわりの道具</b>		
いどぐるま 井戸車	水汲み桶（釣瓶）を上げ下ろしするための滑車。 井戸の上方に組んだ屋形に取り付け、二つの桶をつないだ綱を通す。これで上げ下げが軽くなる。志野焼のものもある。	【井戸】 いがわ・いけ・いご・いずみ・いつい・いどかわ・いのんとー・かー・かわ・くみかわ・しみずがわ・ちりけー・つついけ・つほかわ・つりがわ・つるい・つるいけ（つるい）・つるべ・どよ・ゆがわ・ゆつ・いけど・ゆいど 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 つるべおけ 釣瓶桶	掘り井戸の水を汲み上げる装置（釣瓶）に用いる桶をいう。 縄や竹竿の先にとりつけられた。古代・中世は主として曲物製の桶が使われ、近世以降は短冊状に割った板を箍で押さえた結桶が主流になった。肉厚の杉板を鉄の箍で押さえたものが多い。	【釣瓶】 うぶる・かばじー・くばじー・きす・くりまき・くるまき・しゃく・しり・しる・すいー・する・ちー・ちーうき・ついでい・とうい・ついでい・ついでいー・つりー・つっべ・つり・つりっこけ・つりでうけ・つる・つるい・つるべたんご・ぶら・まきいど 【滑車を利用した釣瓶】 くるま 【はねつるべ】 つりおけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【釣瓶】 かばじー・きしー・くばずー・くりまき・くるまき・しー・しゃく・じゅきー・たんご・ちりー・ついでい・つりー・つづれ・つり・つるい・ぶら・つづれ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）



名称	説明	さまざまな呼称
 ておしぼんぶ 手押しポンプ	井戸の水を汲み上げるのに用いる手押しの鋳物製ポンプ。 明治末より普及した。取っ手を上下させて地下水を吸い上げる。 この動作を漕ぐといった。	
 ふね 槽	水を溜めたり、水に浸して洗ったりするために使う、箱形もしくは舟形の器。	
 ふろおけ 風呂桶	体を洗うための湯を張る桶もしくは釜。湯槽。 湯沸かし装置と一体になったものもある。一人もしくは複数人で浸かる。湯槽から湯を汲み出す小桶を指すこともある。  鉄砲風呂、五右衛門風呂、石風呂 など。	【風呂桶・浴槽】おせっしょ・おろけ・こが・ふろだる・ゆがま・ゆこが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ちょうずばち 手水鉢	手を洗ったり口をすすぐための水を入れておく器。 柄杓を添え、これで水をすくい手を洗った。  石鉢、吊手水 など。	【手水鉢】はんど・はんどばち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 せんめんぎ 洗面器	顔や手を洗うための湯や水を入れる器。 古くは素焼や陶製で、薄板を曲げてサクラの皮で綴じた曲物製など、小形の盥が用いられ、手盥・洗面盥などと呼ばれた。真鍮やホーロー製が出回ったのち、洗面器と呼ばれるようになった。  洗面器、手盥、洗面盥、手水盥 など。	【洗面器・手水盥】こがい・ちよーずだらい・ちよーだらい・びんだらい・ちよんだらい・てだらい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 たらい 盥	水や湯を入れ、中でモノを洗ったりする浅めの容器。 手盥と足盥を組にして嫁入り道具にもなった。大きめの足盥は、産湯、行水、洗濯用などにも使われた。  手盥、足盥 など。	【洗面用の桶】ちゅーじだれー・ちゅーずたりゃー・ちゅんだれー・ちよーずたらい・ちよーずだらい・ちよーだらい・ちよーつだりゃー・ちよーんたらい・ちよーんだらい・ちよずだらい・ちよだらい・ちよつだらい・ちよんだらい・ちよんだらい・ちんざらい 以上、『標準語引分類方言辞典』（佐藤亮一） 【盥】えーば・げーしん・じよーずばち・せんそくばち・せんたくたんご・たいへ・はぎり・はんぎり・はんじり・はんぞー・ちよーずばち・はんぎり 【金盥】かなびんだれー・かんかん・めんぼー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ておけ 手桶	水を入れて運ぶための取っ手のついた桶。	【手の付いた桶】あげたご・こおけ・さげ・さげおけ・さごけ・てたご 以上、『標準語引分類方言辞典』（佐藤亮一） 【手桶】いない・かそげ・からげ・きつだめ・こじよーけ・ごんぶり・さげ・たご・たんご・ちよーで・つしけ・ておけ・てすり・てたご・てだる・にない 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ひしゃく 柄杓	水など液体をくむ用具。 木・タケ・金属製などの浅い筒状の容器に柄をつけたもの、ひょうたんを割ったものなどがある。	【柄杓】おーまがり・おくみ・かいはけ・かいはぎ・くさつ・くしゃ・くしゃく・くしゃつ・けーき・けーぎ・けき・さーい・さし・さち・ししゃうていら・しゃくし・にーぶ・にーぼーま・にぶ・にぶー・ねーぶ・ふだい・ふだり・ふだる・みーぼー・みーぶ・むーんだり 以上、『標準語引分類方言辞典』（佐藤亮一） 【柄杓】さし・にーぶ・にぶ・ねーぶ・しゃく・しわく・にーぶ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 こえおけ 肥桶	大小便を溜めるのに用いた甕や桶などの容器。 住まいの便所の地中に埋め込まれ、落ちてくる大小便を受けた。  肥壺、肥甕 など。	【便所の中に埋めてある大きい肥おけ】あとおけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（佐藤亮一） 【肥溜桶】あげおけ・いっぼ・ころがし・はず・たもけ・とーご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 きんかくし 金隠し	便所の穴の前に付けた覆いや陶製の便器をいう。	
 あさがお 朝顔	陶磁製の小便器。漏斗型の小便受けの下に、尿小便甕（溜）へ通す細い管がついている。外観が開花した朝顔に似ていることから名づけられた。	
 おまる お虎子	持ち運びのできる便器。 お厠（かわ）ともいう。だ円形のものが多いが、丸型や浅い桶型などもあり、素材も木製・陶磁器製・金属製など多様。	
 しびん 尿瓶	一時的な尿入れとして使う便器。 おもに寝たきりの病人や幼児用に使われるもので、男性用と女性用では形が違う。ガラス製が普及する以前は陶製で、横長ではなく壺形だった。	

名称	説明	さまざまな呼称
<b>掃除用具</b>		
バケツ	水などを入れて持ち運ぶための手桶。 水汲み、掃除、釣り、洗濯など水まわりに使用。結桶にかわってブリキ製のものが広く出回るようになった。	
 ぞうきん 雑巾	拭き掃除に用いる布片。 乾いたままで埃を拭ったり、濡らして絞り汚れをふき取ったりする。おもに叩きや箒をかけたあとの雑巾がけに使用。	【雑巾】あしぬぐい・いたふき・いたふきん・おしめし・ざふき・ざふつ・したふき・しぶき・しぶきん・しぶきん・しょふき・すすい・すする・つする・たたみつすり・たたみつすり・たたみすり・ふいきん・ふきもん・ふきん・ふたしき・ふたふき・ふつきん・ふっけん・もどふき・もどふきん・もどふき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【雑巾】いたふき・おしめし・ざふき・しすり・しぶき・しぶきん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はたき 叩き	建物の室内や器物の埃や塵を払い落とすのに用いる清掃具。適当な幅に裂いた端切やホゴ紙、羽毛などを束ねて細い丸竹の柄をつけた。	【叩（はたき）】うちばらい・うちぼき・うちぼき・おちぼき・うちわぼき・おちばらえ・くみうち・くみうち・くみうち・くみうちむぬ・くみたち・くみふあれ・くみうち・くみうち・くみたち・くみはたき・くみばらい・くみうち・くみうち・くみはれ・くみうち・ざい・ざいはらい・ざい・ざいはい・ざいはたき・ざいはらい・ざいはらい・ざや・さんばらい・さんばらい・しで・せいはれ・だい・たたき・ちはらい・ちゃーぼき・ちりうち・ちりたたき・ちりはらい・ちりはれ・ちりぼき・つちはたき・ばはらい・はんばらい・ぶちばき・ほこいたたき・ほこったたき・ほこりうち・ほこりたたき・ほっばらい・ほんでん・ほんぼり・ほんぼり・もっばらい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【塵払】うちばらい・うちぼき・おちぼき・くみうち・くみふあれ・くみうち・くみたち・くみはらい・ざい・ざいぞー・ざいはい・ざいはたき・ざいはらい・さんばらい・しで・たたき・ちりうち・ちりはらい・ちりぼき・ぶっばらい・ほこりたたき・ほんでん・ざいはらい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ほうき 箒	掃き掃除に用いる道具。 植物や羽など適度なしなりを持つ材料を束ねて用いる。柄をつけたものも多い。  材料別に竹ボウキ、シュロボウキ、モロコシボウキなど、用途別に座敷箒、手箒、庭箒、荒神箒 などの種類がある。	【箒】さむらい・たんば・とさかほき・なぜ・なで・なでほき・なでぼき・はき・はきん・はいき・ばうき・はき・ははき・ははきん・ふってい・ぼき・ぼーぎ・ぼーし・ぼつゝい・よせ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【箒】さむらい・なぜ・なで・はき・よせ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ざしきぼうき 座敷箒	箒のうち、おもに室内を掃くのに用いる。	
 たけぼうき 竹箒	外庭や道などを掃くのに用いる箒。 モウソウチクなどの枝などを束ねて作った。	【竹の枝で作った箒】おろぼき・がらがらぼき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【竹箒】あらよせ・おろとぼき・おろぼき・からぼき・くわぼき・こわぼき・ささぼき 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 くまで 熊手	落ち葉などをかき集めるのに使う道具。先端を曲げた割竹を放射状に並べ、柄をつけた形状。	【落ち葉などをかき集める熊手】くまざらい・くまざれ・くまだらい・くまんざらい・こまかき・こまざま・こまさら・こまざら・こまざらい・こまざらいかき・こまさらえ・こまざらえ・こまざり・こまざれ・こまじやら・こまだらい・こまでざらい・こまんざらい・こまんざらい・こまんざれ・こもざらい・まつごくざらい・まつばかき・まつばこさき・もばかき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ちりとり 塵取	箒で掃き寄せたごみを取り集め、運ぶ道具。 箕に持ち手をつけたような形のものが多い。	【塵取】えびぞーけ・えぼ・かたくち・かなみ・ごそとり・こみとりみ・さきなし・さくなし・せみ・たかみ・たろみ・ちーとーぞーき・ちみとり・ちりぞーけ・ちりとりさき・ちりとりぞーき・ちりとりぞーけ・つちみ・てだかみ・み・みかい・みみぞーけ・めつきや 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【ごみとり・塵取】いしみ・いたみ・いぼ・えびぞーけ・えぼ・かたくち・ごみとりみ・さきなし・ずんどり・ちちみ・ちみとり・ちりかき・てぞーけ・てだかみ・ほーぎ・ほげ・じょれん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 くずいれ 屑入	一時的に紙くずなどのごみを入れておく器。 屑かごともいう。	【紙屑籠】ほーぐかご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
<b>その他</b>		
むしかご 虫籠	虫を飼育する籠。竹製の籠が多い。	
とりかご 鳥籠	小鳥を飼う籠。主にウグイス・メジロなど。篠竹や真竹を用いた。	【鳥籠】くー・さしこ・さしご・さしごち・さしっこ・すずめかご・たる・ちむている・びゅーむでいる・めこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【小鳥籠】こばん・さしこ・とりめこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
 ねこつぐら 猫つぐら	猫の寝床。藁などで編み、囲炉裏のわきなどにおいた。	
 きんぎょばち 金魚鉢	金魚を飼ってながめるための鉢。主にガラス製や陶器製。	
かき 花器	花をいける器。素材も形もさまざま。	
けんざん 剣山	植物を刺して立たせるための台。平たい容器に花を活けるため考案された。台座にびっしり針を植えたものや、陶器や石などに多くの差し込み穴を開けたものなどがある。	
 せんていばさみ 剪定鉢	植木・果樹・盆栽などの剪定に用いる鉢。主に洋鉢形で、2本の刃をX字に交差させ、ピンあるいはボルトで接合した。	
ゆきかき 雪掻	雪を掘って掻きのけたり屋根の雪下ろしに用いる道具。四角い板に柄をつけたものや、鋤の形に一木作りにしたものなどがある。	<b>【雪掻の道具】</b> えぶり・えんぶり・かいしき・かいしきへら・かいすき・かえんすき・かしき・かすき・かすきべら・くすきべら・かつすき・きやんしぎ・きやんすき・くしき・けしき・けしき・けんしぎ・こいしき・こいしき・こいすき・こいすき・こいずき・こえずき・こいしき・こいしきべら・こいしけら・こいせき・こいすき・こいすき・こいすきべら・こいすきほり・こいすきゆい・こいすけ・こいつき・こしき・こしきだ・こす・こすくい・こすけ・こすけん・こすき・こすきだ・こっば・さんてべら・じょんば・ゆきいた・ゆきかたし・ゆきすき・ゆきつき・ゆきはね・ゆきはり・ゆきべら・ゆきよけ・ゆすき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) <b>【雪掻具】</b> おーばんば・かい・かいすき・かいすきべら・きやんすき・けんしぎ・こいすき・こいしきべら・こいすき・こしき・こすき・さつて・てこ・てすき・てんすき・ばんば・ばんばこ・ゆきつき・ゆきばんば 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
 うちわ 団扇	あおいで風を起こしたり、かざしとしたりする道具。細く削った竹の骨に紙または絹布などを貼ったもの。蚊や蠅を追い払うのにも使った。 法団扇、水団扇、京団扇、奈良団扇、江戸団扇、軍配団扇、烏団扇、魔除団扇 など、さまざまな種類がある。	<b>【団扇】</b> あうち・あおち・あぶち・うっぱ・おーじ・おーに・おちゃ・おちや 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) <b>【団扇】</b> あうち・あおち・あぶち・だいせん 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
 かび 蚊火	煙をいぶらせ、蚊やブヨなどを追い払う道具。	<b>【蚊遣火】</b> かくすべ・かっこ・かふすべ・かぶすめ(かふすべ)・たべ・ほろひな 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
 かやりき 蚊遣器	蚊やブヨを追い払う蚊遣を焚く台。豚の形を模して作った陶器のカヤリブタなど、形はさまざま。	
 かや 蚊帳	四隅を吊って寝床をおおい、蚊を防ぐ布。麻が一般的であるが、近世木綿蚊帳もできた。	<b>【蚊帳】</b> かさ・かちや・かちよー・かちよ・かつあ・かつたー・かつつあ・はつあ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)
 はいちょう 蠅帳	蠅除け塵除けとする道具。とくに梅雨時から夏にかけて、風通しをよくして食物の腐敗を防ぐために使われた。	<b>【蠅帳】</b> はいらず 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)
はえとりがみ 蠅捕紙	蠅を捕えるため粘着性のある薬品を塗った紙。明治時代、アメリカやドイツから輸入された。	
 はえたたき 蠅叩き	蠅を叩いて打ち殺すために用いる道具。	
 はえとりびん 蠅捕り瓶	蠅を捕るための仕掛け容器の一種。高さと同径が30 cmくらいのタマネギ状のガラス器で、上部の口に蓋がつく。容器の中に米のとぎ汁または水を入れ、容器の下に紙を敷き飯粒や砂糖水を置くと、蠅が下部から入り、水の中に落ちる仕組み。また、ガラス管の一方に漏斗があり、もう一方の球状の膨らみに水を入れ、天井の蠅を捕る器具もある。	
 ねずみとり 鼠取り	鼠を捕らえる器具。籠の中に餌を入れて生け捕りにする罠や、バネの力で挟む仕掛けなどがある。	<b>【鼠や雀などを捕る籠】</b> からねこ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操篇)